

大分市 市内遺跡確認調査概報

— 2009・2010年度 —

国指定史跡大友氏遺跡

大友氏館跡第22次調査

大友氏館跡第23次調査

中世大友府内町跡第86次調査

中世大友府内町跡第89次調査

中世大友府内町跡第94次調査

城原・里遺跡第13次調査

2011

大分市教育委員会

大分市

市内遺跡確認調査概報

— 2009・2010年度 —

国指定史跡大友氏遺跡

大友氏館跡第22次調査

大友氏館跡第23次調査

中世大友府内町跡第86次調査

中世大友府内町跡第89次調査

中世大友府内町跡第94次調査

城原・里遺跡第13次調査



調査遺跡位置図(1/60,000)

2011

大分市教育委員会

例 言

- 1 本書は平成 21・22 年度に大分市教育委員会が実施した市内遺跡確認調査の概要報告である。
- 2 本書には国指定史跡大友氏遺跡（大友氏館跡）、中世大友府内町跡、城原・里遺跡の調査成果を収録した。
- 3 発掘調査の費用は、国と県から補助を受けて、大分市が負担した。
- 4 遺構の写真撮影は、各担当者が行った他、空中写真に関しては熊本航空に委託した。
- 5 出土遺物の整理は、五十川雄也、長直信、松浦憲治、河野史郎の他、奥村義貴、小野千恵美、木村藍子、倉増美智代、佐藤良子、稗田智美、松本晴美（大分市教育委員会嘱託）が主としてこれにあたった。
- 6 本書に用いた方位はすべて座標北（G. N.）である。また、基準点の座標値は平面直角座標系第Ⅱ系（城原・里遺跡は世界測地系、これ以外は、日本測地系）による。
- 7 本書で用いた遺構略号は原則として、SB:掘立柱建物、SE:井戸、SK:土坑、SX:性格不明遺構（整地層など）を示す。
- 8 本書で使用した遺跡名の略記号は以下の通りである。大友氏館跡―「館」 中世大友府内町跡―「町」 城原・里遺跡―「城」

本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される（遺跡名を略した部分がある）

館	23	SB	055
遺跡名	調査次数	遺構種別	遺構番号

- 9 出土遺物、記録資料は大分市文化財資料室（大分市顕徳町 3 丁目 2 番 43 号）に収蔵、保管している。
- 10 本書に用いた出土遺物の分類及び年代観は以下の文献を参考にしている。

太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊XV―陶磁器分類編―』

小野正敏 1982「15～16 世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No. 2（染付は青花に読み替える）

上田秀夫 1982「14～16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No. 2

森田 勉 1982「14～16 世紀の白磁の分類について」『貿易陶磁研究』No. 2

乗岡実 2005『備前』『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年 資料集』

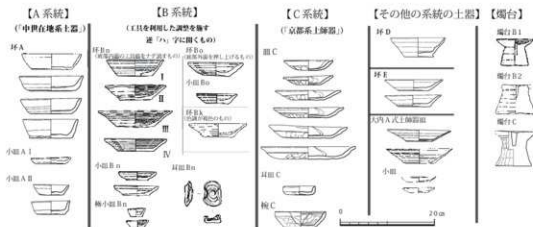
吉田寛 2003「中世大友府内町跡出土の産地不明焼締陶器について」『貿易陶磁研究』No. 28

瓦質・土師質土器火鉢：山村信榮 1990「太宰府出土の瓦質土器」『中近世土器の基礎的研究』VI

土師質土器鍋：河野史郎 2002「出土土師器・火鉢及び瓦質土器雑器の分類と編年」『大友府内 4』大分市教育委員会

中西武尚 2005「大友氏館跡北東部地区の遺構変遷と出土土師器」『大分市市内遺跡確認調査概報～2004 年度～』大分市教育委員会

また、中世土師器供膳具類については、以下のように分類したものを使用する。



中世土師器供膳具類 分類図 (1/8)

11. 本書の執筆は五十川雄也、長直信、松浦憲治が行い、長が編集した。

12. 調査体制については次のとおりである。

平成 21 年度 (2009 年) [確認調査]

調査主体 大分市教育委員会 教 育 長 足立 一馬

事 務 局 大分市教育委員会

文化財課

次長兼課長 玉永光洋

参 事 沼田祐治

課長補佐 塔鼻光司

課長補佐兼管理係長 福田誠一

主幹兼文化財普及担当 佐藤典幸

主 査 関井和信

桑原 治

栗田博之 渡辺政雄

神崎小由美

指導主事 橋本和美

主 任 竹中智美 加藤千文

宮崎勲 山上海二郎 藤生重徳

文化財係長 坪根伸也

専門員 池邊千太郎 高島豊

河野史郎 塩地潤一

主 任 永松正大 佐藤道文

主 事 五十川雄也(調査担当) 長直信(調査担当) 石川ゆかり

嘱 託 井口あけみ 神田智美 奥村義典 佐藤孝則

羽田野裕之 上原雅平 仲町憲治 藤瀬育子

松本晴美 木村聡子 小野千恵美

佐藤良子 小島愛 倉増美智代

三瓶桂司 山下昭記 鍋島千恵子 飯野久恵

大分市歴史資料館

参事兼館長 渡辺和夫

課長補佐兼副館長 久多曜純明 武富雅宣

主 査 関田寛夫

安部幹夫

指導主事 甲斐寛

船野公徳

研修教諭 由良一郎

主 任 中西武尚

嘱 託 古瀬美鈴 大平直子 藤井雅希 阿南希依

北原洋之 安部和広 高島豊月

平成 22 年度 (2010 年) [確認調査・整理作業]

調査主体 大分市教育委員会 教 育 長 足立 一馬

事 務 局 大分市教育委員会

文化財課

次長兼課長 玉永光洋

課長補佐 塔鼻光司 福田誠一

管理係長 関井和信

主 査 栗田博之 渡辺政雄

神崎小由美

斎藤慎悟

指導主事 橋本和美 小野富広

主 任 竹中智美

永松正大

宮崎勲 山上海二郎 藤生重徳

主 事 横川貴俊

文化財係長 坪根伸也

専門員 池邊千太郎 高島豊

河野史郎 塩地潤一

主 任 佐藤道文 五十川雄也(整理担当)

主 事 長直信(調査・整理担当) 石川ゆかり

事務局 松浦憲治(調査・整理担当)

嘱 託 井口あけみ 神田智美 奥村義典 佐藤孝則

羽田野裕之 上原雅平 仲町憲治 藤瀬育子

松本晴美 木村聡子 小野千恵美

佐藤良子 小島愛 倉増美智代

大分市歴史資料館

参事兼館長 渡辺和夫

課長補佐兼副館長 久多曜純明 武富雅宣

主 査 安部幹夫

秋吉えつ子

指導主事 船野公徳

佐藤真由

研修教諭 長田哲

主 任 中西武尚

嘱 託 古瀬美鈴 大平直子 藤井雅希 阿南希依

北原洋之 安部和広 高島豊月 神志原崇

目 次

第 1 章 国 指 定 史 跡 大 友 氏 遺 跡

1. はじめに	
(1) 調査に至る経過	1
(2) 調査組織	1
2. 大友氏館跡第22次調査	
(1) 調査目的と結果	2
(2) 時期別土地利用	3
3. 大友氏館跡第23次調査	
(1) 調査目的と結果	4
(2) 調査概要と主要遺構	4
(3) 調査のまとめと課題	7

第 2 章 中世大友府内町跡第86・89次調査(推定御蔵場跡)

1. 調査に至る経過	8
2. 調査組織	11

3. 調査目的と概要

(1) 調査目的	11
(2) 地点ごとの調査概要	11
(3) 出土遺物	36

4. 調査結果

(1) 時期別変遷	37
(2) まとめ	42

第 3 章 中世大友府内町跡第94次調査

1. 調査に至る経過	44
2. 調査概要	44

第 4 章 城原・里道跡第13次調査

1. 経過および調査の目的	46
2. 調査組織	47
3. 「城原地区」における調査成果	47
4. 調査概要	47
写真図版	48

第1章 国指定史跡 大友氏遺跡 [大友氏館跡] (発掘調査概報 11)

1. はじめに

(1) 調査に至る経過

平成21年度～22年度の大友氏関連遺跡の確認調査は、大友氏館跡・3地点(館22・23・24次)についておこなった。年度末の調査となった館24次の概要と館22・23次の出土遺物については、次年度に報告を行う。館22次調査については外郭構造把握のため推定東外郭地点を、館23次調査については、館内部の様相把握を目的として中心施設から東外郭推定地付近を調査地点とした。

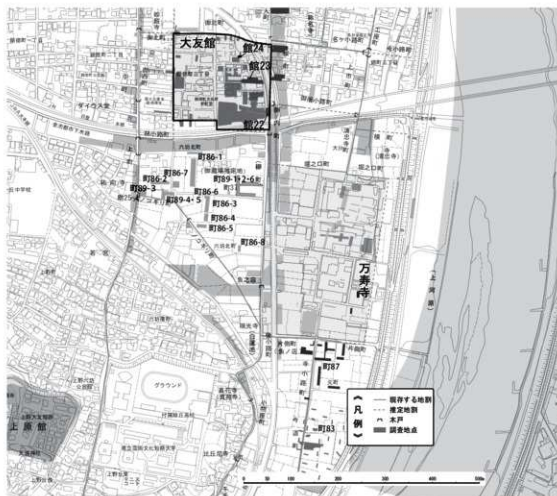
(2) 調査組織

調査指導者 河原 純之(前川村学園女子大学教授)
 後藤 宗俊(別府大学名誉教授)
 小野 正敏(人間文化研究機構 理事)
 坂井 秀弥(奈良大学教授)
 渋谷 忠章(前大分県歴史博物館館長)
 榎宜田 佳男(文化庁主任調査官)

調査指導 大分県教育委員会

調査主体 大分市教育委員会 教育長 足立 一馬

調査担当 五十川 雄也 長 直信



第1図 大友氏遺跡・中世大友府内町跡調査地点と府内町復元想定図(1/8,000)

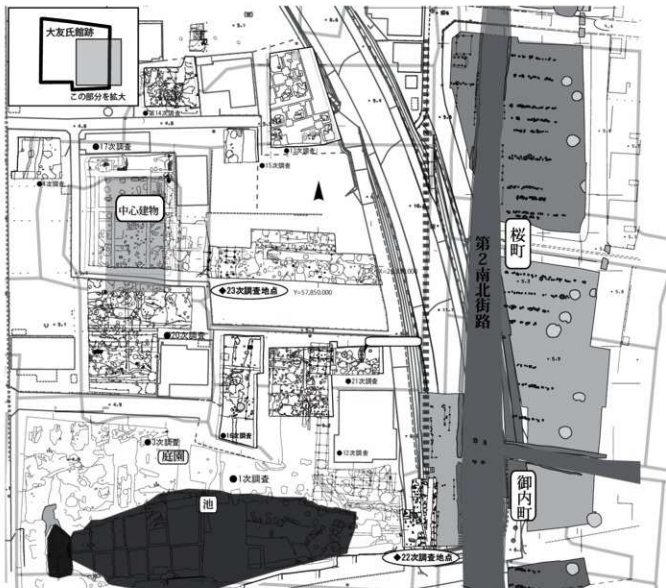
2. 大友氏館跡第22次調査(第3図、写真1)

推定大友氏館跡の南東隅にあたる東外郭線推定ラインに所在する。調査期間は平成21年10月1日から平成22年1月14日。調査面積は204.2㎡である。

(1) 調査目的と結果

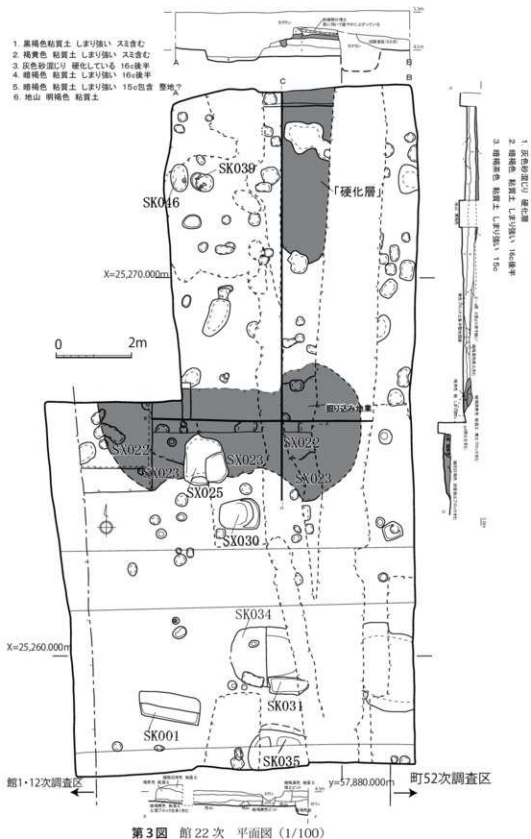
今回の調査目的は大友館東側の外郭ラインの様相を把握することである。調査区の西側は館1次(庭園跡等)・12次(礎盤石をもつ建物跡・井戸跡・連続土坑(植栽痕?)、東側は町52次(区画溝跡・第2南北街路跡)調査区である(第2図)。館22次調査区の大半は掘乱による削平をうけており、遺構の残存状況は良好ではない。遺構検出面は、地表から約1.5m下である。16世紀代の遺構は、包含層・ピット・土坑状遺構・掘り込み地業跡・硬化層(整地)等を検出、出土遺物は京都系土師器・漳州窯系青花などで出土量は少ない。14世紀後半から15世紀代の遺構は包含層・ピット・廃棄土坑などを検出し、出土遺物は環A・小皿A、石銅片などで、廃棄土坑などから多く出土している。

調査目的とした館東側の外郭ラインについては、掘乱の影響も大きく、他地点の外郭ラインの様相(溝状遺構や積土遺構など)は確認できなかった。しかしながら、16世紀後半段階の硬化層と掘り込み地業跡(SX022-023)は大友館東側外郭ラインに関連する遺構の可能性があり(第3図トーン部分、写真3)、土堀もしくは土塁状構築物の基礎地業跡の可能性があると考えられる。



第2図 大友氏館跡周辺の調査状況 (1/1,000)

(『大分市史』中巻 付図Ⅱ「戦国時代の府内復原想定図」を基本に発掘調査地点・地籍図を重ねたもの)。



(2) 館22次調査区の時期別土地利用(第3図)

14世紀後半～15世紀：廃棄土坑など展開(SK033など)。15世紀代：廃棄土坑空間(SK031・SK034など)

16世紀前半：遺構はほとんどない。推定では、空閑地もしくは土塁などの区画施設が存在し、後に破壊された可能性もあろう。

16世紀後半：土塀もしくは土塁などの区画施設の可能性あり(推定天正14年以前)。

16世紀末→町屋などの建物空間(推定天正14年以降) (五十川雄也)

3. 大友氏館跡 第23次調査(第4図)

推定大友氏館跡の中央東側にあたる(第2図)。調査期間は平成22年9月13日～11月10日である。調査面積は540㎡である。

(1) 調査目的と結果

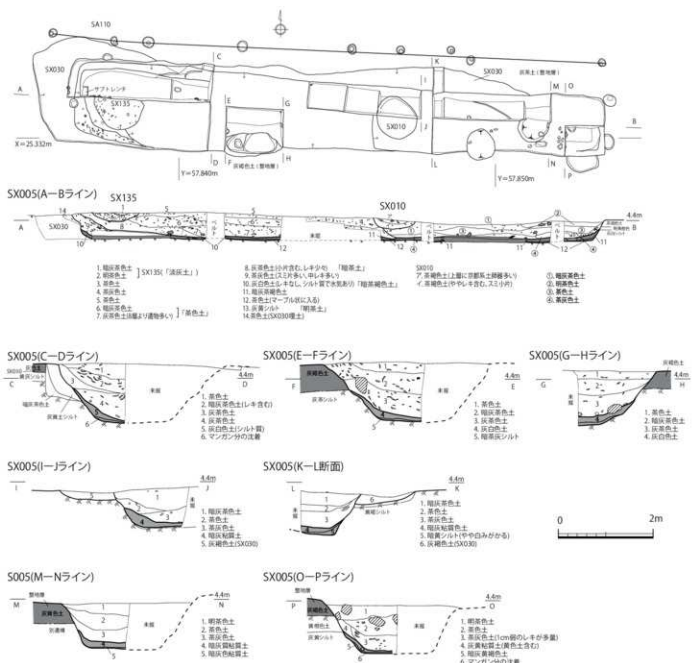
【目的】：館の中央から東端の遺構の様相把握を目的とし、館の中心建物確認地点から館の東端付近へ東西に長い調査区を設定して調査を行った(第2図、写真2)。
【結果】：調査地点は東外郭推定ラインの約10m西にあたり、調査区の東側では最盛期の館の時期の遺構は確認できていないことから、館の門をくぐってすぐに広がる空地であった可能性がある。調査区西端では、館23SD090とした南北方向の溝が確認されたことから、中心建物の東側に区画溝が存在していたこととなり、館内部の景観を考える上で大きな成果となった。検出したピットの大部分が15世紀代の遺構であり、大型遺構は16世紀末のものが多い。また、調査地点の中央では、館23SX005とした、16世紀前葉頃の東西17m、南北2m、深さ0.8mの規模の巨大な土坑を確認。これまでの調査のなかでも最大級の規模であり、16世紀前半頃の館内部の空間利用を考える上で重要な発見となった。

(2) 調査概要と主要遺構(第4図)

①15世紀中頃～後半の遺構(環Aが出土する遺構) 館23SX020(写真7)：調査区西側で検出した直径1.6m程の円形を呈する土師器溜り。出土遺物には完形品が多く、大部分が環Aだが、小皿Aや大内A式土師器も確認できる。同種の遺構はこれまでの館の調査でも数例確認されており、平面プランや土層断面ともに掘削ラインが不明瞭な点特徴的なことから、16世紀代の土師器廃棄土坑のような深い掘削を伴う廃棄土坑というより、地表面ないし、整地土内に土器をまとめて積み重ねたような印象をうける。これまでの出土例からみても、出土遺物の時期も共通しており、なんらかの儀礼に伴うものか。館23SX030：調査区中央の館23SX005と重複する性格不明遺構。館23SX005に切られているため、規模の確定が難しいが、現状では、南北3.0m、東西15.5mを測る。 ※尚、調査区全体で検出したピットは、大部分が15世紀代の遺構である。

②15世紀末～16世紀前葉の遺構(環Bnが出土する遺構) 館23SB055：一間1.5m～1.6m、N-4°45'49"Eの方位をもつ掘立柱建物跡。全てを半截していないが、礎盤石を伴う柱穴がある。東西を別の遺構で切られているため規模は不明。館23SD060：調査区北側で検出した幅1.2mの溝。館23SX005に平行した方向に掘削される。西側を館23SX100に削平される。館23SX005(第6図、写真4・5・6)：東西17m、南北1.8～2.2m、深さ0.8mを測り、断面形状的に掘削された大型土坑。東端は隅丸方形に掘削され、西側の隅は直角に掘削される。土層観察から遺構は上記の規模に掘削された後、遺構中央の館23SX010付近で掘り返しが確認できる。第6図A-BラインやC-Dライン土層にみられるように、この掘り返しラインより西側では夥しい量の環Bnが出土しており、西端部付近では完形率の高い環Bnと茶灰色土の層が交互に斜堆積する状況が観察できる。なお掘り返し部分(中央より東側)からは遺物の出土は少なく埋土の質も異なる。出土遺物の組成は、備前焼播鉢や陶磁器の破片が極僅かに出土するのみで、土師器が主体であることから、廃棄土坑としての機能が考えられる。埋没の最初期には、遺構の全面において「暗灰色粘質土」(第6図土層図トーン部分)が0.4～0.5mほど堆積していた状況が確認でき、土師器が多量に廃棄される層は、この粘質土を掘り返した後に、再堆積したことが読みとれる。従って、遺構掘削当初の機能を土師器廃棄遺構とするには検討が必要である。なお、出土遺物の大半をしめる環Bnは口径11cm前後のものが圧倒的に多く、大型の環Bnや極小皿、耳皿も少量確認できる。また、埋土中には白色の玉砂利(石炭)も一定量検出できることから、付近に玉砂利を敷いた空間があった可能性がある。土師器や玉石に混じって人頭大の礫や圓形の炭塊も出土している。肉眼では食物残渣は確認できていないが、土壌のサンプルを採取しているので、後日水洗を行い確認したい。館23SA110(第6図)：館23SX005と軸をそろえて小形の柱穴が連続して確認できたことから、館23SX005にともなう櫓の可能性もある。館23SX005北側より約0.7m程度の空間において設置されている。E-2°38'33"Sの方位をもつ。ほぼ同様の方位

- をもつ東西方向の櫓は館14次でも確認されており(館14SA035)、この段階の館内部の主軸方位であった可能性も考えられるが、出土遺物は少なく時期の確定はできない。館23SX100：調査区北西隅で検出した東西7.5m + α 、南北3.2m + α で方形に掘削された遺構。館23SX005と軸が揃っており、出土遺物に坏Bnを含むことから同時期の遺構と考えられる。方形プランを呈する規格性のある大型遺構であり、掘り込みを伴うことから、建物の基礎遺構などの可能性を考えている。館23SX015：調査区東端で検出した土器の密集遺構。直径1.4mの範囲で、坏Bn片がまとまって出土した。明確な遺構プランは確認できていない。
- ③16世紀第2四半期～第3四半期頃の遺構(坏Bnと薄手の皿Cが出土する遺構) 館23SX010・135(第6図)：ともに館23SX005の最終埋没後に形成された土師器廃棄遺構。館23SX010は中央付近で確認した直径1.2m、深さ0.3m程度を測る円形プランの遺構。多量の薄手の皿C(京都系土師器)が出土した。館23SX135は、館23SX005西端で確認した直径1.6m、深さ0.3mを測る遺構。館23SX135からは、坏Bnと少量の薄手の皿Cが出土した。館23SD025(第5図、写真8)：調査区西端で検出した幅約2m、深さ1mを測る南北溝。館17次で確認した中心建物の東端より12m東側に位置し、明治期の字地割と重複する。約20m北で調査した館15次では、南北溝(館15SD025)が確認されており、その延長部分と考えられる。溝は、概算で、2°36' 東に振って掘削されている。複数の掘り返しが認められ、平面プランにおいて切り合い関係が明確に確認できた部分については、館23SD090・SD085として別の遺構番号を付与している。館23SD025は、大きくみても古・中・新の3つの掘り返しがあり、館23SD025古としたものは、深さ1.1m、幅1m以上と考えられ、遺物は非常に少ないが坏Bの破片が出土している。館23SD025中としたものも、同じく幅1m以上で、深さ1.5m程である。溝底は、0.6mの厚さで全て薄手の京都系土師器で埋められており(第5図14層)、溝の機能時に一括して廃棄されたと考えられる。館23SD025新としたものは、幅約2m、深さ0.8mである。この段階の遺物は少なく、丸瓦が1点出土している。
- ④16世紀第4四半期前半頃の遺構(やや厚手の皿Cが出土する遺構) 館23SD090(第5図、写真8)：館23SD025を再掘削した溝であり、幅1.1～1.8mを測る。水田により削平された部分を勘案すると、本来は0.5～0.6mの深さがあったと考えられる。交差溝をもつ備前焼燼鉢が出土した。館23SX085：館23SD090を再掘削する幅1.0mを測る遺構。北側は調査区外へ延びるため南北3.5m程度を検出した。現状では深さ10cm未満の浅い遺構であるが、館23SD090と同様、本来は0.4m程度の深さをもつと考えられる。土坑もしくは溝状遺構の可能性が考えられる。溝の切り合い関係から、天正年間の館最盛期の時期に伴う区画遺構の一部か、館焼失後の町屋の背割りに関連する遺構の可能性がある。館23SX070：館23SD025(090・085)に平行して検出した2つの柱穴遺構。南北2mの間隔で掘削されており、柱痕部分はともに焼土(焼けた壁土)で埋められている。館23SX080：館23SD025(090・085)に平行して検出した2つの柱穴遺構。南北2mの間隔で掘削されている。館23SX070・080は、調査区内において、ともに一対しか確認できていないが、柱間や柱痕内の埋土の状況、検出位置などから新旧関係にあると考えられる。櫓などの遮蔽施設を想定し、同一規模の柱穴が連続すると考えた場合、館23SX070は南側には展開せず、館23SX080は北側には展開しないこととなる。これらの遺構からは、16世紀後半頃の遺物は出土していないが、館23SD090・025と軸をそろえることから、同時併存の可能性を考えている。なお、館23SD025の東側にも柱穴が溝に沿って南北方向に並ぶ部分がある。
- ⑤16世紀第4四半期末頃の遺構(厚手の皿Cが出土する遺構) 館23SE040：調査区南東部で確認した直径およそ3.5m程度を測る井戸跡。掘方部分のみを検出。出土遺物は少ないが、厚手の皿Cと丸瓦等が出土している。館23SK025：調査区東部で確認した直径およそ2.0mを測る円形遺構。人頭大の凝灰岩がまとまって廃棄されていた。



第6図 館23SX005及びSX010・030個別図(1/120、横断土層(下図)は1/80)

(3) まとめと課題

- ・中心建物の東側については館21・23次調査と面的に調査を行ってきたが、16世紀第4四半期の遺構は希薄であり、当時は基本的には空閑地であったと考えられる。文献史料の「当年年中作法日記」の記載からは、館の門をくぐると「遠侍」の建物や「大庭」があったことが伺える。今回の「空閑地」という調査成果と文献史料との関連が注目される。
- ・中心建物の東端より12m東側で、南北方向の溝を確認した。溝は数度に渡って掘り返されており、この部分の区画が16世紀第2四半期～16世紀第4四半期にかけて、重要な意味をもつことがわかった。また、これまで中心建物周辺の遺構の展開が不明瞭であった館最盛期(天正年間：16世紀第4四半期)の段階に、中心建物前面を走る南北方向の溝が機能している点が判明したことは大きな成果といえる。なお、当調査区の南西部に位置する館20次では16世紀第2四半期～第3四半期頃の東西方向の溝である館23SD195・140を検出しており、館23SD025との関連が想定される。溝の性格や、溝と並行する柱穴列(館23SX070・080)の性格確定のために、延長部分の状況確認が今後の課題である。

(長 直信)

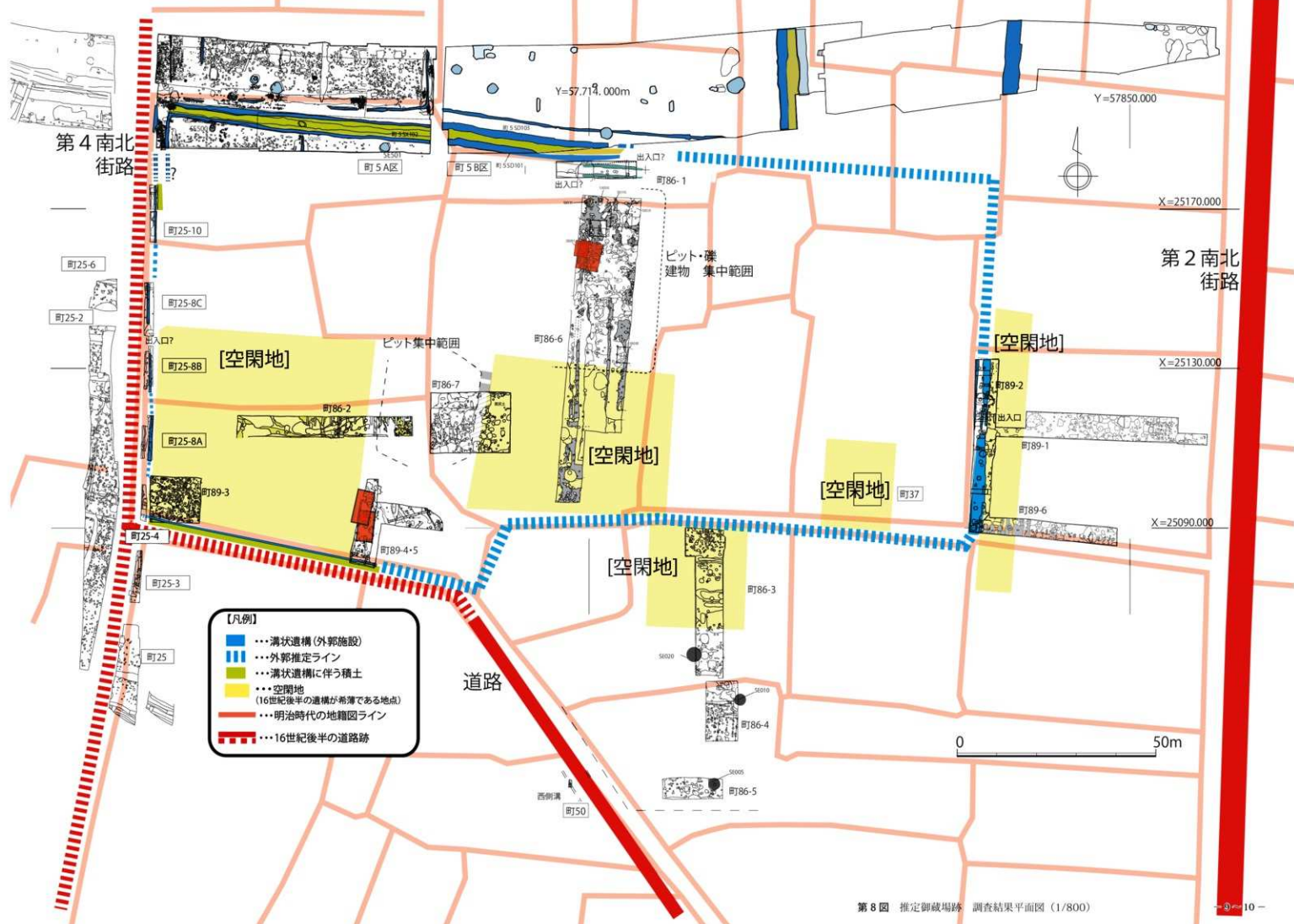
第2章 中世大友府内町跡第86・89次調査(推定御蔵場跡確認調査)

1. 調査に至る経緯

大友氏遺跡は、平成17年の旧万寿寺地区の追加指定以来、守護館である大友氏館跡、大友氏の菩提寺のひとつである旧万寿寺地区、「府内古図」に記載される推定御蔵場跡の三位一体による保存・活用・整備が不可欠であるとされてきた。御蔵場跡の存在が推定される地域は、これまで昭和36年(1961)に都市計画決定を受けた元町公園範囲内に包括されていたため、遺跡に影響を与えるような開発は規制され、遺跡の保護・保存が図られてきた。ところが、平成21年に大分市内の長期未着手大規模公園の見直しがなされ、元町公園予定地が見直し対象とされた。これにより、推定御蔵場跡の保護・保存のための範囲確認が急務となり、平成21年度、22年度の2カ年にわたり確認調査を実施することになった。平成21年度は、中世大友府内町跡(以下、町)第86次調査を2009年10月1日から2010年12月10日まで行い、町第89次調査を翌年2010年5月6日から2010年6月15日まで行った。



第7図 調査地点位置図 (1/2,000)



第8回 推定御蔵場跡 調査結果平面図 (1/800)

2. 調査組織

調査指導者	河原 純之（前川村学園女子大学教授） 後藤 宗俊（別府大学名誉教授） 小野 正敏（人間文化研究機構 理事） 坂井 秀弥（奈良大学教授） 渋谷 忠章（前大分県歴史博物館館長） 瀬田 佳男（文化庁主任調査官）
調査指導	大分県教育委員会
調査主体	大分市教育委員会 教育長 足立 一馬
調査担当	五十川 雄也 長 直信 松浦 憲治

3. 調査目的と概要

1581年～1586年頃の府内を描いたと推定されている「府内古図」は、現在12枚ほどが確認されている。これらは図中に記載された施設の有無などから、A類～C類の3つに分類されている（木村1993）。推定御蔵場跡とは、C類の古図の中で、三方が白壁で囲まれ、内部に「御蔵場」「大友御蔵場」「蔵場」などと表記されている地点をさす。府内古図での位置は、大友館の南、万寿寺の西にあたり、この古図を基に想定した「戦国時代の府内復原想定図」（大分市史編纂委員会1987）によると、現在の都市計画図上では約5haに及ぶ広大な敷地にあたる（第7図、写真9）。なお、文献に残る「蔵」の記録としては、天文13年（1544）に大友氏20代当主であった義鑑による「土蔵」建築用の材木の調達を命じた文書が存在する。

（1）調査目的

調査の目的は、御蔵場に関連する16世紀後半～末の遺構の性格を確認することであり、町86次調査では、①北外郭の確認②西外郭の確認③南外郭の確認④内部の様相の確認を目的に8地点（町86-1～8）を、町89次調査では、①東外郭の確認②南外郭の確認③西外郭の確認を目的に6地点（町89-1～6）の調査区を設定し調査を行った（第7・8図）。町86次調査の総面積は2189㎡、町89次は937.7㎡であり、今回の確認調査の総面積は3126.7㎡である。

（2）地点ごとの調査概要

以下では、「外郭」・「内部」・「町屋域」と考えられる各地点別の概要を述べる。

A：推定外郭付近の調査

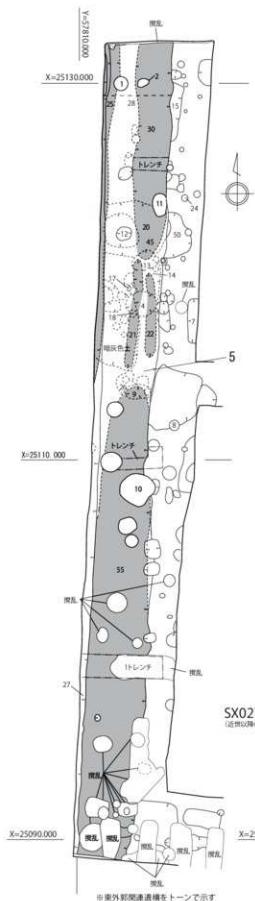
①北外郭

町86-1では、町5次B区（大分県教育庁埋蔵文化財センター2005a）で検出された東西溝（町5SD101：溝の時期は16世紀後葉）の延長（町86-1SD045）を確認した他、この下層からは15世紀末～16世紀初頭頃の東西溝（町5BSD153）の延長（町86-1SD030）、これらを切って形成される東西溝（町86-1SD015・020）などを検出した。東西方向を指向した遺構が15世紀から16世紀末まで連続と継続して形成されており、町5SD101・151や、町86-1SD015・020は北外郭を構成する遺構と考えられる。

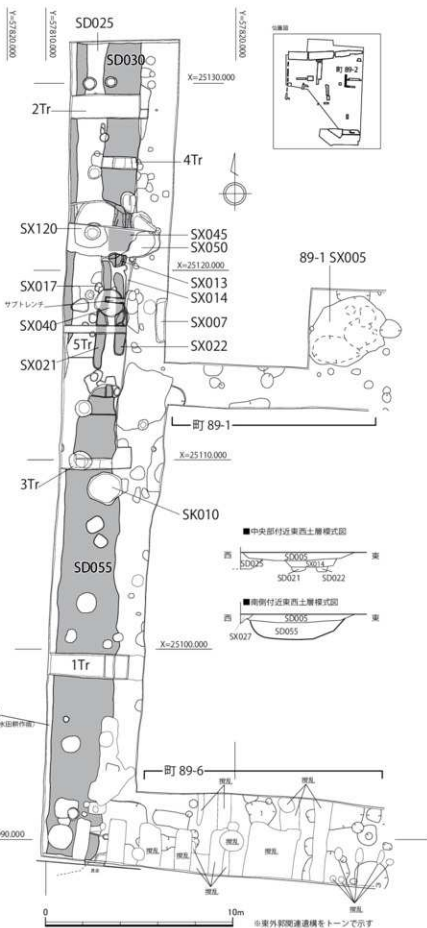
[町86-1(80m)](第9図、写真11)

■溝状遺構

町86-1SD015・SD020(第9・10図、写真17・19)：調査区東側で検出した東西溝。町86-1SX005に切られるが、町86-1SX005の西側には続かないので、町86-1SX005の内部で止まっていると考えられる。町86-1SD015は、幅0.5m、深さ0.7mを、町86-1SD020は幅0.5m～0.8m、深さ0.8mを測る。北側に位置する町86-1SD020は埋

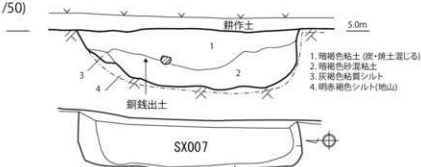


第11図 町89-2 切り合い図 (1/200)



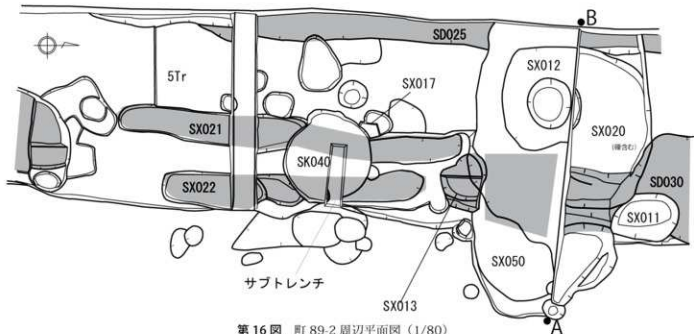
第12図 町89-2 平面図 (1/200)

■SX007東壁土層図(1/50)



■SX020周辺遺構平面図(1/80)

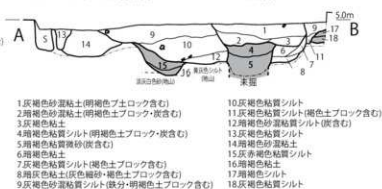
第15図 町89-2SX007平面図(1/80)



第16図 町89-2周辺平面図(1/80)

■サブトレンチ南壁土層図(SK040・SX022東西土層)

■A-Bライン土層図(SX012・020・050土層)



■5トレンチ北壁土層図(SX021・022、SD025東西土層)



A-Bライン土層模式図



第17図 町89-2周辺土層図(1/80)

土中に礫を含み、埋土も硬くしまっている。溝の方向性や切り合い関係、規模からみて、対となる溝の可能性が高い。遺構の相対的な切り合いからみて16世紀後葉の遺構と考えられる。

町86-1SD030(第9・10図、写真18)：調査区全面で確認できる東西方向の溝。幅2.7m、深さ0.6m+αを測る規模の大きな溝で、北側の調査区である町5B区のSD153と同一遺構と考えられる。サブトレンチ(C-D)断面では、上層の3～4層は硬くしまった土が流れ込んだ状態で埋没したことが観察できる。出土遺物は極めて少ないが、町5B区での調査成果によると15世紀末～16世紀初頭の遺構と推測されている。

町86-1SD045(第9・10図、写真19)：調査区北端で検出した東西方向の溝で、幅1.1m+α、深さ0.5m以上の規模をもち、北側の調査区である町5B区のSD101と同一遺構と考えられる。サブトレンチ(C-D)断面では、確認できないことから、これより西側で溝が収束している可能性がある。掘削をおこなっていないので出土遺物はないが、町5B区での調査成果によると16世紀後葉～末の道路状遺構ないし土塁の側溝の可能性が指摘される遺構である。

■性格不明遺構

町86-1SX005(第9・10図)：トレンチ中央で検出した東西4.0m、南北4.0m+α、深さ1.4mを測る大型遺構。遺構の底付近では、水性堆積が確認でき、溝などの排水機能をもつ遺構の可能性があり、北側は調査区内で収束する。町86-1の5m南側に位置する町86-6では延長は確認できないことから、南側4mほどで収束するが、東西に曲がる可能性がある。周辺の全ての遺構を掘削していることや、出土遺物には漳州窯系の碗や青花F群がみられることから、16世紀末に埋没した遺構と考えられる。なお、埋土中には焼土は確認できず、中位からは人頭大の礫が多量に検出される。

■建物関連遺構

町86-1SB040(第9・10図、写真18)：調査区東端で検出した掘方直径0.5m、深さ0.6m、柱痕直径2.2mを測る柱穴遺構で、底部には扁平な石を礎盤石として用いる。時期の分かる遺物は出土していないが、町86-1SD030の上面より形成されている。柱穴は町86-1SD045が収束する付近で検出されており、推定御蔵場跡の中央北端に位置することもあるため「門」などの施設の可能性を考え周囲を精査したが、調査区内では対となる遺構は確認できなかった。

②東外郭

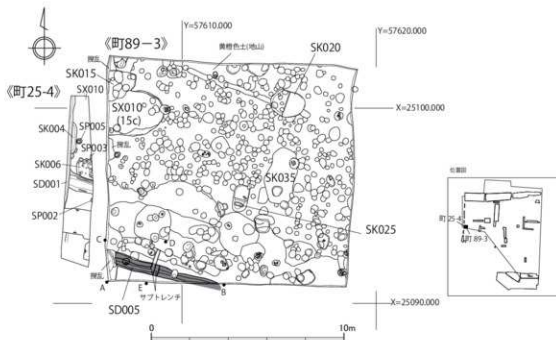
町89-2では、南北方向の溝(町89-2SD030・055及びSD025)を確認。出土遺物の時期や検出位置などから推定御蔵場と東側の町屋(「柳町」)とを隔てる区画溝(東外郭)と考えられる。また、調査区中央付近では溝が途切れる地点があり、現状では出入口を想定している。溝の東側の町89-1では、町屋と考えられる井戸や土坑が密集するが、溝の東10m幅は同時期の遺構が希薄な「空閑地」となっており、出入口に向かう通路的なエリアである可能性が高い。

[町89-2(208.5m)](第9図、写真14)

■溝状遺構

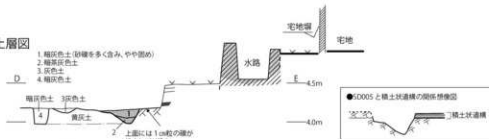
町89-2SD005(第11・12・13図)：調査区西側全面で検出した幅3.5m、深さ0.25mを測る遺構。下層の溝状遺構である町89-2SD030や町89-2SD055の最終埋没後にレンズ状に窪んだ部分に堆積する遺構。土灰釉の掛った唐津焼碗や青花皿F群などを含むことから(第37図10・12)、1590年～1600年代には完全に平坦に整地されたと考えられる。

町89-2SD055(第11・12・13・14図、写真20)：調査区中央南側で検出した幅2.0m～3.0m、深さ0.7m～1.1mを測る溝状遺構。町89-2SD005の除去後に検出した。北端は町89-2SX009に切られるが、隅丸状にすばまって収束する。1トレンチと3トレンチの断面から(第14図)、北側にのびるにつれて幅が狭くなり、深さも増すが、収束地点では緩やかに浅くなる。調査区南端では溝の東側のラインが西へ屈曲するプランが確認でき、調査区南端付近で西へ曲がる可能性が高い。近世1b期の備前焼播鉢や、京都系土師器の形態から(第37図19・36、28・35)、

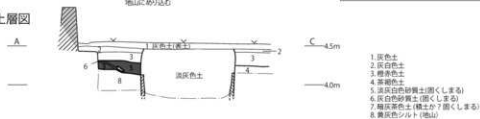


第18図 町89-3,町25-4遺構全体図(1/200)

■D-E土層図



■A-C土層図



■A-B土層図



第19図 町89-3土層図(1/50)

16世紀末頃に埋没したと考えられる。

町89-2SD030(第11・12・13・14図、写真22)：調査区中央北側で検出した幅1.5m～2.0m、深さ0.4m～0.8mを測る溝状遺構。町89-2SD005除去後に検出した。南端は、町89-2SX020や町89-2SX013に削平されるが町89-2SD055同様に、隅丸状にすばまって収束する他、南側にのびるにつれて幅が狭くなり、深さも増すが、収束地点では緩やかに浅くなる。トレンチから出土した遺物の様相からみて、町89-2SD055よりもやや古い傾向をも

つが、遺構の形状や平面プランの連続性から、対となる区画溝と考えられる。

町89-2SD025(第11・12・13・14図)：調査区西端で検出した東西1.0m+ α 、深さ1.7m+ α を測る。町89-2SD005除去後に検出した。調査区の西端で検出したため、全容は不明だが、南北18m以上の規模をもつことから溝状遺構と判断した。2トレンチの断面では(第14図)、鋭角な傾斜を持って掘削されている状況が確認できる。近世1b期の備前焼鉢鉢や、京都系土師器の形態から、16世紀末頃に埋没したと考えられ、町89-2SD030や町89-2SD055と並行して掘削されていることから、これらと併存、もしくはこれらの区画を踏襲する溝と考えられる。

■調査区中央付近の遺構

調査区中央部は、町89-2SD055および町89-2SD030が途切れる部分であり、区画を構成する出入口と考えられる地点である。この地点では、地山である「黄灰色土」を面的に確認したが、整地の可能性のある「暗灰色土」が部分的に覆う箇所がありこの土を除去すると、町89-2SX021・町89-2SX022とした溝状遺構を検出した。

町89-2SX021・022(第16・17図、写真20・21)：調査区中央で検出した小規模な溝状遺構。町89-2SX021は幅0.7m、深さ0.3m、南北6.1mを測る遺構で、町89-2SX022は幅0.7m、深さ0.3m、南北9.0mを測る遺構。ともに町89-2SX014や町89-2SK040といった遺構に削平されるが、町89-2SD055、町89-2SD030とは切り合いに関係なく溝の方位とも近似していることから、町89-2SD030・055に関連する遺構の可能性が高い。具体的な機能は不明であるが、町89-2SX022からは、灯明皿として利用されたものや内面見込みに焼成後の加工痕のあるものを含む小皿Cが多量に出土しており(第38図16・17)、祭祀的な意味合いを持つ遺構か。

■その他の遺構

町89-2SK010・SK014・SK040(第12・16・17図)：外郭に関連する遺構(町89-2SD055・030、SX021・022)の埋没後に形成された遺構群である。町89-2SK010は直径1.7m、深さ0.45mを測る円形遺構。町89-2SK014は、町89-2SX013に切られ町89-2SX021・022の北側を削平する東西1.5m、南北2.5m+ α 、深さ0.2mの遺構で、埋土中からは、町89-2SX022から掘き上げられた遺物と考えられる小皿Cが多く出土している(第38図8・9)。町89-2SK040は町89-2SK014および町89-2SX021・022を削平する直径1.8m、深さ0.5mを測る円形遺構。

町89-2SX012・20・050(第16・17図)：町89-2SD030の南端を削平する大型遺構群。第17図のA-Bライン土層図や土層模式図に示したように、町89-2SD030や町89-2SD025を切って形成される。町89-2SX012・町89-2SX055と町89-2SX020は平面プランや断面形状からみて、町89-2SX055を井戸枠部分、町89-2SX020を裏込め、町89-2SX012を井戸埋没後の土坑として解釈することもできるが、掘方が非常に浅いことからやや疑問が残る。出土遺物は極めて少ないが、町89-2SD030との切り合いからみて16世紀末の遺構と考えられる。

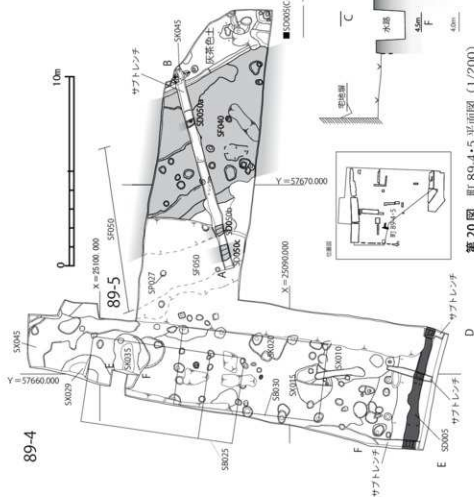
町89-2SX007(第15図)：調査区中央東端部で検出した東西0.5m+ α 、南北2.3m、深さ0.6mを測る遺構。遺構の大部分が調査区外へ延びるため、性格は断定できないが(第38図25～45)、多量の遺物が出土しており廃棄土坑の可能性もある。出土遺物の組成は町89-2SD055と類似しており、近接した時期に埋没したと考えられる。

③西・南外郭

南外郭：町89-2で確認した南北溝(町89-2SD055)は、調査区南端でゆるやかに「西側に屈曲」しており、調査区の南側を東西方向にはしる現在の農道(幅約4m)直下に南外郭となる溝が巡っている可能性が高い。また、推定御蔵場跡の西側調査区である町89-3・4・5では、現在の地割に沿って東西方向の溝(町89-3SD005・町89-4SD005)を確認。溝の南側には積土を確認した。積土と溝の性格を道路もしくは築地のいずれかに断定することは難しいが、調査区の遺構の分布からみて、築地などの南外郭の可能性が考えられる。この外郭関連遺構は、町89-2で確認した東外郭との接続関係は確認できないが、町86-6の南端や町86-3の北端でも検出できないことから、町89-2の南側の農道と町89-3・4・5を結ぶラインに、南外郭が存在する可能性がある。

西外郭：推定御蔵場跡の南西隅に設定した町89-3では、前述した東西溝(町89-3SD005)が調査区外へ延び、想定される西外郭は検出できていない。なお、町5A区では北側を画する溝に接続する小規模な2条の溝が調査区南側へ延びている点、第4南北街路沿いの調査である町25次調査でもこの延長と考えられる小規模な溝が断片的に

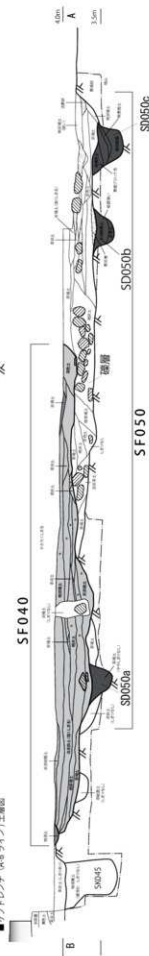
89-4



第20図 町89-4・5平面図 (1/200)

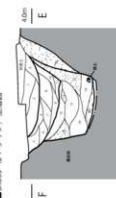
■サブトレンチ (A&Bライン)土層図

SF040



第21図 町89-4・5土層図 (1/50)

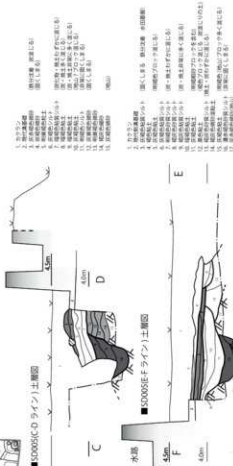
■S0033 (Eチライン)土層図



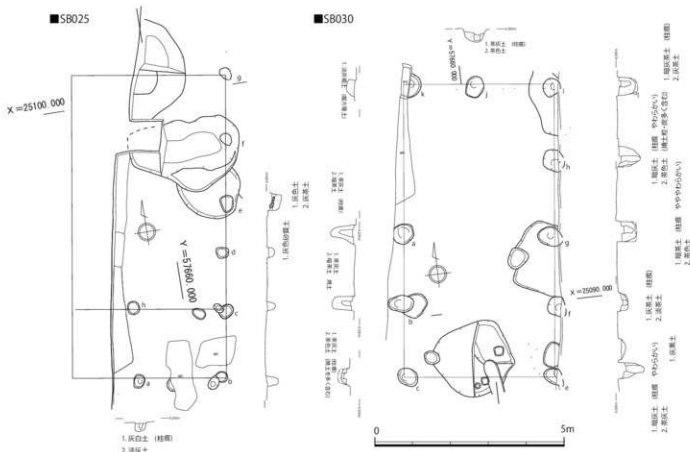
第22図 町89-4SX035土層図 (1/50)

1-50

0 2m



1. カンテン
2. 砂質土
3. 砂質土
4. 砂質土
5. 砂質土
6. 砂質土
7. 砂質土
8. 砂質土
9. 砂質土
10. 砂質土
11. 砂質土
12. 砂質土
13. 砂質土
14. 砂質土
15. 砂質土
16. 砂質土
17. 砂質土
18. 砂質土
19. 砂質土
20. 砂質土
21. 砂質土
22. 砂質土
23. 砂質土
24. 砂質土
25. 砂質土
26. 砂質土
27. 砂質土
28. 砂質土
29. 砂質土
30. 砂質土
31. 砂質土
32. 砂質土
33. 砂質土
34. 砂質土
35. 砂質土
36. 砂質土
37. 砂質土
38. 砂質土
39. 砂質土
40. 砂質土
41. 砂質土
42. 砂質土
43. 砂質土
44. 砂質土
45. 砂質土
46. 砂質土
47. 砂質土
48. 砂質土
49. 砂質土
50. 砂質土



第23図 町89-4・5掘立柱建物跡個別図 (1/100)

検出されており、一部では積土状の遺構も確認されている(大分市教育委員会2007)ことから、これらの溝が西外郭に関連する遺構である可能性は高い。

[町89-3(73.4m)、町89-4・5(119.1m)](第18・20図)

西外郭および南外郭を想定して設定したトレンチである。

■溝状遺構

町89-3SD005(第18・19図、写真26)：調査区南西端で検出した幅0.6m、深さ0.2m、長さ6.0mにわたって検出された溝状遺構。溝の南側には、近世以降の水田層直下で硬化した層や1cm～3cmほどの礫を含む層が確認でき、溝の南側には積土状の遺構が存在したと考えられる。溝からの出土遺物は少ないが、青花碗E群が出土しており(第39図3)、16世紀中頃～後半の遺構と考えられる。

町89-4SD005(第20・21図、写真25)：調査区南端で検出した幅0.5m～0.7m、深さ0.5m、長さ6.5mにわたって検出された溝状遺構。第21図の町89-4SD005(C-Dライン)土層では(E-Fライン)土層に示すように、溝の南側には硬化した層群が確認でき、町89-3SD005と同様の積土状の遺構が存在したと考えられる。また町89-4SD005埋没後の溝直下にも硬化した層群(第21図C-Dライン3・4層、E-Fライン5・8層)が確認され、積土状遺構が二時期にわたって展開したようである。なお溝からは時期の判明する遺物は出土していないが、40m西に位置する89-3SD005と同一規模で同一構造をもつことから、連続した遺構と考えられる。

■道路状遺構

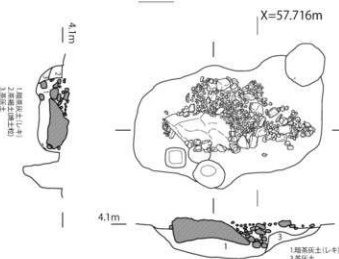
町89-5SF040(第20・21図、写真24)：調査区のほぼ全面で検出した東西幅6.5mの道路状遺構。東端には側溝の可能性のある深さ0.05m、幅0.3mの小規模の溝を、西端にも側溝と考えられる深さ0.05m、幅0.2m～0.5m



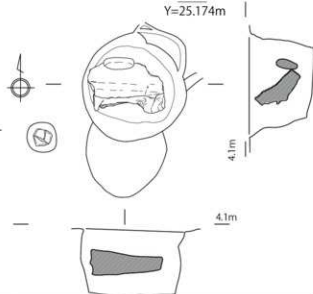
第24図 町86-6切合い図 (1/350)

第25図 町86-6平面図 (1/350)

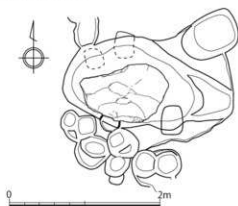
■SX035



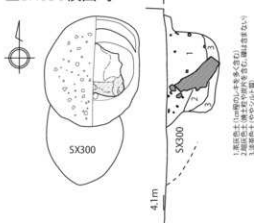
■SX030礫除去後



■SX035礫除去後



■SX030検出時



第26図 町86-6SX030・SX035 個別図 (1/50)

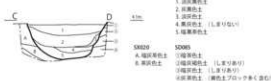
の溝を検出した。遺構の中央に設定したサブトレンチから、遺構は深さ0.3m～0.4m程の掘り込みを行い、固く締まった土と砂層をおおよそ互層に積んでいる(写真23)。出土遺物は少ないが、京都系土師器である皿Cを含まず、坏Bのみで構成されており(第39図18～20)、15世紀後葉～16世紀前葉頃に施工・使用された道路と考えられる。

町89-5SF050(第20・21図)：町89-5SF040の下層で検出した東西幅8.5mの道路の可能性のある遺構。中央に設定したサブトレンチ東側では、町89-5SD050aとした幅0.5m、深さ0.3mの溝を検出し、サブトレンチの西側では町89-5SD050b・SD050cそれぞれ幅0.6m、深さ0.3m、幅0.7m、深さ0.4mとした溝を検出した。溝の埋没後は、町89-5SF040と同様、砂質土や硬化した層が確認できる。町89-5SF040施工時の削平や、町89-5SD050埋没後の積み土形成による削平のため、町89-5SD050の性格は決め難いが、調査区の北西部に位置する町5A区で検出したSD431やSD411～413は、複数の溝で構成された区画状の遺構(通路状遺構)と考えられており、16m北側に位置する町86-2でも町89-5SD050の延長付近で2条の南北方向の溝が検出されている。これらの遺構は、御蔵場推定地の南東部から北西部方向に延びる一連の遺構と考えられる(詳細は第48図)。この場合、町89-5SD050機能段階の通路状遺構と、町89-5SD050埋没後の積み土堆積時の道路状遺構の2時期が想定される。町89-5SD050の埋没時期は町89-5SD050aから出土した青磁碗から15世紀代、積み土堆積に含まれる人頭大～拳大の礫群に含まれる青磁碗の形態からみても15世紀代に収まる。

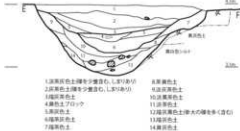
■SD005 (A-Bライン) 土層図



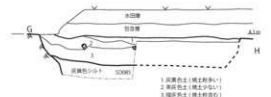
■SD010 (C-Dライン) 土層図



■SD085 (E-Fライン) 土層図



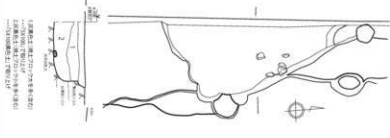
■SX135 (G-Hライン) 土層図



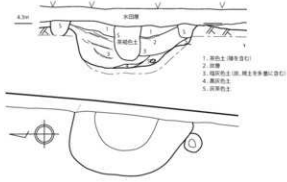
■SX160 (I-Jライン) 土層図



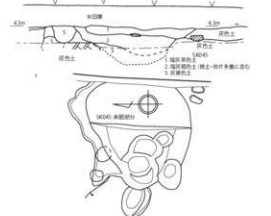
■SX100 個別図



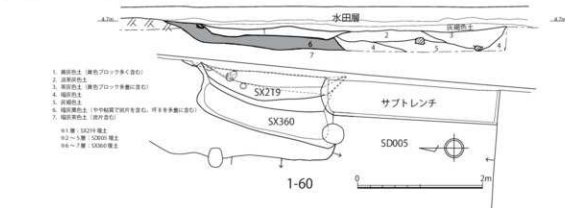
■SK060 個別図



■SK045 個別図



■SD005・SX219・SX360 個別図



第27図 町86-6 個別図 (1/60)

■掘立柱建物跡

町89-4SB025(第23図、写真36)：調査区中央で検出した東西1間以上、南北5間の南北棟の掘立柱建物跡。主軸の振れは、N-9° 17' 35"-E。柱間は、南北1.5m～1.7m、東西2.0m～2.5mであり、南北長8.0m、東西長2.2m+αである。掘方は直径0.3m～0.4mと小規模で深さも0.2m～0.4m前後と浅い。調査時は柱穴a～eまでの建物と認識していたが、整理段階でf～hが並ぶことがわかった。出土遺物は土師器の小片のみである。

町89-4SB030(第23図、写真36)：調査区中央で検出した東西2間、南北4間の南北棟の掘立柱建物跡。主軸の振れは、N-7° 58' 10"-E。柱間は、南1.8m～2.0m、東西1.8m～2.0mであり、南北長7.5m、東西長4.0mである。掘方は隅丸方形のものもあるが、概して円形を呈する。直径は0.5m～0.6mである。深さは0.3～0.6mを測り、柱穴によって高低差をもつ。出土遺物は小片のみであるが、比較的多く出土した。16世紀後半頃のものが主体である。なお掘方埋土に焼土を含むものがある。

■その他の遺構

町89-4SX010・SK020・SK035、町89-5SK045(第20・21図)：町89-4SX010、町89-4SK020は、町89-4SB030に切られる遺構で、ともに東側が削平される。町89-4SX010は不定形な溜まり状の遺構、町89-4SK020は隅丸方形の遺構である。町89-4SK020は遺物の組成から、16世紀中頃の時期と考えられ(第39図28～32)、町89-4SB030の年代を考えるうえで、重要である。町89-4SK035は、調査区北側で検出した東西3.0m、南北1.8m、深さ1.0mの土坑。焼土片を含んだ土で埋没する。青磁碗の形態や古手の皿Cの形態からみて(第39図33～36)、15世紀末～16世紀前半頃の遺構か。町89-4SB025がこの遺構を切っていることから、町89-4SB025の年代を考える上で参考となる。町89-5SK045は、調査区東端の町89-5SF040の東側に堆積する整地層と考えられる「茶灰色土」除去後に検出した遺構で、東西長0.6m、深さ0.8m。16世紀前半頃の遺構と考えられる(第39図21・22)。

B：内部の調査

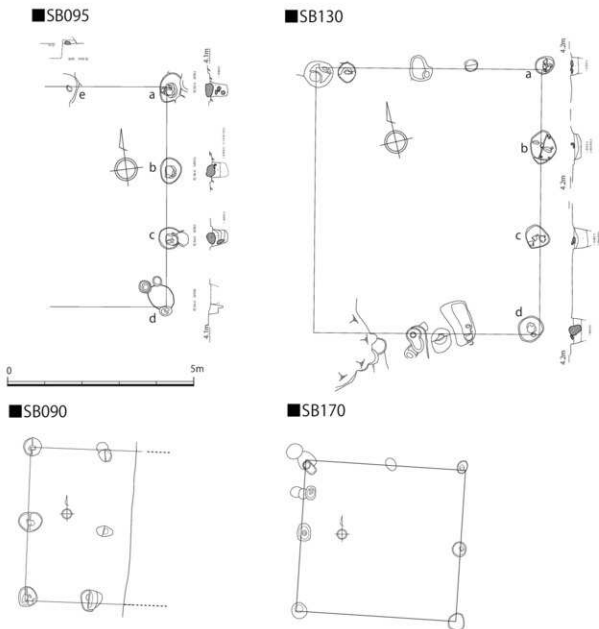
推定御蔵場跡の内部の様相を把握するために、中央付近西側の区画の広い畑地内に町86-6・7を、南北方向の農道を挟んで西側に東西の長い町86-2を設定した。町86-6の北半分においては集石や礎盤石をもつ建物遺構や火災処理土坑などを検出(写真28)した他、町86-6北側や西側に隣接する町86-7の東側で整地層と考えられる「黒灰色土」が島状に展開していた。町86-2では、16世紀後葉の遺構は確認できず当時は「空地」であった可能性が高い。

[町86-6(1014m)](第24・25図、写真11・12)

御蔵場内部と想定される部分に設定した南北方向のトレンチ。第24図のトーンで表示した部分が地山であり、非常に高密度に遺構が分布する。調査区北側は町86-6SX110とした「茶灰色土」の整地層(16世紀前半頃)がアメーバ状に広がっており、遺構は町86-6SX110の上面に展開するものと、整地層が及んでいない部分には「黄灰色土」の地山上面に展開する遺構がある。調査区南側は、町86-6SX020とした性格不明の大型遺構(整地ないし溝)が調査区中央に南北方向に広がっており、付近では地山が確認できない。調査区南端部には町86-6SX020は及んでおらず、「黄灰色土」の地山上面から遺構が展開する。南側の遺構群は溝状遺構が多く、その切り合い関係は第25図模式図のように理解できる。

■礎石廃棄遺構

町86-6SX030・SX035(第26図、写真30・33)：調査区北端で検出した礎石と想定される巨石を廃棄した遺構。町86-6SX030は、直径1.4m、深さ0.9mの円形プランの遺構。安山岩製の長軸0.95m、短軸0.65m、最大厚0.4mの略直方体の巨石が出土した。表面は小崩れにより平滑に仕上げる。この面には、0.26×0.26mの角柱のあたり痕が確認でき、礎石として使用されたと考えられる。遺構の埋土中には1cm程の小礫が多量に含まれる。町86-6SX035は東西2.3m、南北1.5m、深さ0.4mをはかる楕円形状プランの遺構。安山岩製の長軸1.2m、短軸0.75m、最大厚0.35mの巨石が大小の礫とともに出土した。石の上面は船底状に隆起し、裏側は凹状に窪む。



第28図 町86-6建物跡個別図(1/100)

町86-6SX030・035ともに、多量の礫と焼土粒を含む土で埋没しており、町86-6SX035で出土した土師質土器火鉢Eは、町86-6SX040出土資料と接合している(第41図9)。近世1b期の可能性が高い備前播鉢片が出土していることから(第40図8)、16世紀末の島津侵攻に伴う火災後に廃棄された可能性が高い。古代官衙や古代寺院の礎石が、近世や太平洋戦争後の開墾等により根締石と共に廃棄された事例は全国的には珍しいものではないが、中世大友府内町跡ではこのような大型石材の出土自体知られておらず、遺構の至近にこれらの石材を使用した建造物が存在したと考えられる。

■溝状遺構

町86-6SD005(第25・27図)：調査南側で検出した溝状遺構。幅2.8m、深さ0.84mを測り、断面「V」字状である。溝は東方向へ「L」字に屈曲し、調査区外へ延びる。町86-6SX219に切られ、土師器廃棄土坑と考えられる町86-6SX360を切る。これらの切り合い関係から、16世紀前葉の遺構と考えられる。

町86-6SD010(第25・27図)：調査南側で検出した溝状遺構。幅1.2m、深さ0.6mを測り、断面台形状である。溝は東方向へ「L字」に屈曲し、調査区外へ延びる。北側は調査北側で細く浅くなって収束するが、南北距離は50m程となり半町規模の方形区画が想定される。町86-6SD005と同一方向に屈曲する平面プランであることから、町86-6SD005を踏襲する何らかの区画施設と考えられる。出土遺物から16世紀中葉頃の区画施設と考えられる(第42図14～18)。

町86-6SD015・SD150(第25図)：調査南西側で検出した溝状遺構。町86-6SD015は、幅0.6m～1.0m、深さ0.05mを測る浅い溝。断面台形状である。溝の南側は調査区内で収束。北側は、整地土と考えられる「暗黒色土」にバックされ南北規模は不明であるが南北20m以上の規模となる。なお、町86-6SD015の南端より約8m程度の空間を置いて、同一線上で町86-6SD150を検出している。幅0.6～0.7m、深さ0.2m程の規模であり、一連の区画溝と考えられる。南北4mから西側へ逆「L字」に屈曲する。町86-6SD015は町86-6SD085を切り、町86-6SD150は町86-6SD160に切られるが、皿Cが出土しており16世紀中葉頃に比定できる。

町86-6SD085(第25・27図)：調査南西側で検出した溝状遺構。幅2.8m、深さ1.1mを測り、断面「V字」状である。溝は東方向へ「L字」に屈曲し、町86-6SD010・SX020に削平される。出土遺物や遺構の切り合いから15世紀後半頃の遺構と考えられる。町86-6SD005とのプランの類似性より同一の性格を持つ遺構と考えられるが、出土遺物(第42図23～26)からみてやや先行する可能性がある。

■火災処理土坑

町86-6SX100(第27図)：調査区中央西端で検出した東西1.2m+ α 、南北2.5m、深さ0.48mの遺構。北側を町86-6SX120に切られる。遺構は、大小の焼土で埋められており、遺構底部面では人頭大の礫が出土した。

■その他の遺構(土坑・井戸・性格不明遺構)

町86-6SX040(第25図、写真34)：調査区北側で検出した直径0.3mの円形遺構。多量の焼土と共に備前焼建水・掛入れ、土師質土器風など茶器関連の遺物(第41図8～12)がまとまって出土した。

町86-6SK025・SK045・SK060(第25・27図)：調査区北側で検出した土坑で切り合い上、もっとも新しい時期の遺構群である。町86-6SK025は調査区北東隅で検出した直径3.4m、深さ0.5mの遺構。町86-6SK045は調査区中央東北端で検出した直径1.6m、深さ0.6mの土坑。町86-6SK065は、調査区中央東端で検出した南北2.0m、東西1.0m+ α 、深さ0.7mの遺構。町86-6SK045・SK065は、焼土や炭によって埋没している。

町86-6SK135・SX160・SE140(第25・27図、写真35)：調査区南側で検出した土坑や井戸。町86-6SK135は町86-6SD085を切る直径3.0m、深さ0.44mの円形土坑。町86-6SX160は東西0.8m、南北2.0m、深さ0.9mの遺構で、町86-6SD150を切る。町86-6SE140は、直径3.0mの掘方をもつ井戸で、中央よりやや北側に寄って直径0.8mの井戸枠プランを検出している。1m程度の掘り下げに留めているが、井戸枠内より獣骨と考えられる骨や、やや厚手の皿Cや備前鉢鉢中世6期頃の製品が出土しており(第42図1～3)、16世紀後半には埋没した可能性が高い。

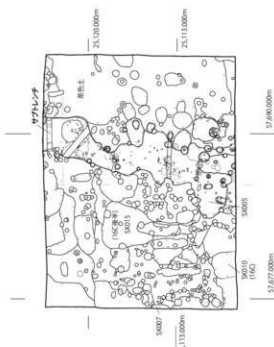
町86-6SX219・360(第27図)：調査区南東端で検出した遺構。町86-6SX219は、町86-6SD010を切る東西0.2m+ α 、南北2.4m、深さ0.2mの遺構。坪Bが出土する(第42図27)。町86-6SX360は、町86-6SD010に切られる東西1.0m+ α 、南北3.0m+ α 、深さ0.4mの遺構で、多量の坪Bが出土した。これらの遺構上面は水田層により削平されていたが、土師器の出土が集中しており(第42図28～36)、坪B段階の土師器廃棄土坑の可能性が高い。

■建物関連遺構

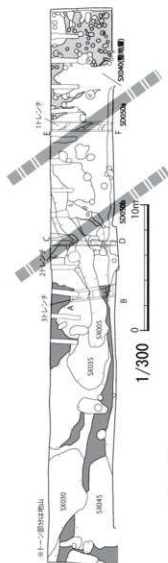
今回の調査では、調査中に3棟の建物を確認し、記録をとっているが、調査終了時に建物の可能性のある数棟を抽出した。

町86-6SB090(第28図)：調査区南東部で検出した東西1間+ α 、南北2間の掘立柱建物跡。主軸の振れは、N-2°47'E。柱間は、南北1.8m～2.0m、東西1.8mであり、南北長4.0m、東西長1.8m+ α である。掘方は直径0.4m～0.6mと小規模である。

町86-6SB095(第28図)：調査区北西部で検出した東西2間、南北3間の南北棟の掘立柱建物跡。主軸の振れは、



第29図 町 86・27 切り合い図 (1/300)



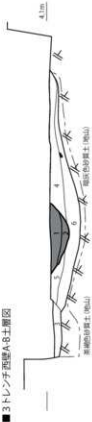
■ 1 トレンチ基礎E土層図



■ 2 トレンチ基礎C-D土層図



■ 3 トレンチ基礎A-B土層図



第30図 町 86・2 サブトレンチ土層図 (1/50)

N-7°43'18"E。柱間は、南北1.8m～2.2m、東西1.8mであり、南北長5.8m、東西長2.6m+αである。掘方は直径0.6m～0.7m、深さ0.5mである。柱穴には焼土が含まれており、柱穴SB095bからは、破損した茶臼など(第41図1～7)が出土している。

町86-6SB130(第28図、写真31)：調査区北西部で検出した東西3間、南北3間の南北棟の掘立柱建物跡。主軸の振れは、N-12°52'36"E。柱間は、南北2.0m～2.4m、東西1.5m～2.0mであり、南北長7.0m、東西長6.0m+αである。掘方は直径0.5m～0.6mである。

町86-6SB170(第28図)：調査区北部で検出した東西2間、南北2間の南北棟の掘立柱建物跡。主軸の振れは、N-2°51'44"E。柱間は、南北1.9m～2.0m、東西1.8m～2.2mであり、南北長4.0m、東西長4.2mである。掘方は直径0.3m～0.4mと小規模である。

[町86-2(65m)・町86-7(300m)](第29図)

町86-2・7は、御蔵場内部及び西外郭の確認を目的に調査区を設定した。結果として、西外郭は確認できなかったが、遺構の密集地と空閑地を確認した。町86-7では、調査区中央に東に振る礫置き遺構(町86-7SX005)が調査区を縦断しており、ここからは厚手の京都系土師器が出土する。この礫群を境に西側は、町86-2東側まで、ビットが高密度で分布する。東側では、「茶色土」とした整地土が面的に覆っている。東側の遺構は極めて少ないが、町86-6に連続する様相と考えられる。町86-2は、調査区東端にはビットが高密度で展開するが、これより西側では町86-2SX040とした整地層に覆われており、小型の遺構は希薄となる。調査区東側では、ビットなどの小型遺構はほとんど確認できず不定形な大型遺構が確認できるのみである。

■溝状遺構

町86-2SD005・SD010(第29・30図、写真27)：調査区中央から東側にかけて展開する東西方向の溝状遺構。幅1.0m、深さ0.3m、長さ14mを検出。西端は丸く収まるが、東側は、北東方向へ延びる。焼土とともに、多量の皿Cが出土した。調査区の北側は、一定スパンで深い撈乱がみられ、遺構が分断されている部分がある。調査区北東側の撈乱に分断されている部分は町86-2SX010として別名称で取り上げているが、堆積土や遺物の出土状況から同一遺構と考えられる。

■道路状遺構

町86-2SD050a・SD050b(第29・30図)：調査区中央部付近にみられる整地層町86-2SX040除去後に検出される遺構。町86-2SD050aは、1トレンチで、町86-2SD050bは、2トレンチで確認した。深さは町86-2SD050aが0.6m、町86-2SD050bが1.0mである。極めて部分的な検出であったが、町89-5SD050でも述べたように、検出した位置や方向性からみて、80m北西で検出された町5A区SD431や町5A区SD411～413の延長とみて間違いないと考えられる。

■その他の遺構

町86-2SX030(第29図)：調査区東西道北側で検出した不定形な溜まり状の土坑。京都系土師器や華南三彩盤(第46図22～25)が出土した。

C：町屋部分の調査

調査対象地の南外郭及び東外郭確認のために設けた南北方向のトレンチ(町86-3～5・8)、東西方向のトレンチ(町89-1・6)では、雑器類を多く含む廃棄土坑や井戸が検出された。これらの遺構は、16世紀後半のものが多く、「府内古図」に示す「ノコギリ町」や「柳町」の一角であった可能性が高い。

①推定「ノコギリ町」付近の調査

[町86-3(260m)、町86-4(120m)、町86-5(75m)](第31図)

町86-3～5は、井戸(町86-3SE020・86-4SE010・86-5SE005)や廃棄土坑(町86-3SX015・SK025)、ビット群、掘立柱建物跡(町86-4SB045・050)を検出し、16世紀後半の町屋である「ノコギリ町」の一角であると考えられる。

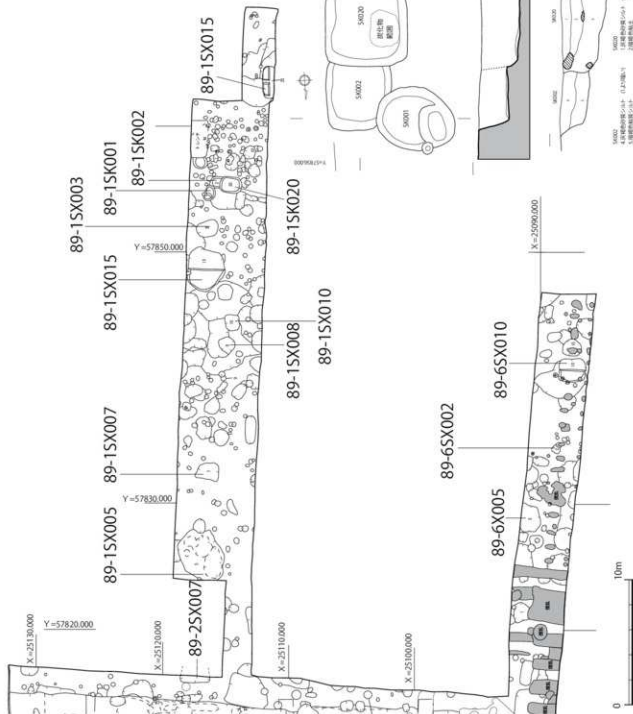


ノコギリ町 推定範囲



$n = 17$, $\text{SD} = 0.0069$

第31図 町86-3・4・5平面図(1/400)



第34図 町 89-1.6 平面図 (1/300)

第35図 町 89-1SK002・SK020 個別図 (1/50)

なお、町86-3は、中央より北側では大型遺構は少なく、16世紀中頃以降、東西方向を志向した東西に長い遺構(町86-3SX040・045、050・055)が点在するが、明確な区画溝や櫓などの遮蔽施設はない。町86-3北端は、町86-6南端と共に南北外郭が想定されていた部分であったことから、共に東西方向の農道の際まで調査を行ったが、結果として外郭らしき溝やビット列は確認できなかった。

■土坑

町86-3SK010・SK035(第31図)：町86-3SK010は、調査区南側で検出した直径2.0mの円形遺構。黒色土で埋没している。町86-3SK035は、薄手の皿Cが出土する町86-3SX040を切り、町86-3SK030に切られる直径1.3m、深さ0.7mの円形遺構。府内以外から搬入された可能性のある土師器坏類(第47図15)や京都系土師器皿Cを模倣した糸切り底の土師器(第47図14)が出土している他、鉄製燗鍋の注口部の破片(第47図16)などが出土した。16世紀中頃～後半の遺構。

町86-3SD050・055(第31図)：調査区北側で検出した溝状遺構。町86-3SD050は幅0.7m、深さ0.35m。町86-3SD055は幅0.5m、深さ0.3m。町86-3SD050が町86-3SD055を切る。町86-3SX040や町86-3SX045と方位が揃うが関連不明である。遺物は小片のみの出土である。

[町86-8(75m)](第32図)

調査対象地点の最南部に設定した調査区である。結果として16世紀代の遺構は確認できず、町86-8SD003とした幅3.5m、深さ1.5mの巨大な南北方向の溝を検出した。SD003北側の一ヶ所で溝が西側へ分岐しているが、SD003との切り合い関係も確認できないことから、溝を共有する複数の方形館の一部である可能性がある。サブトレンチより出土した遺物は14世紀～15世紀代のものであり(第47図33～41)、当該期の周辺様相を考えるうえで重要な遺構である。

②推定「柳町」付近の調査

町89-1・6は、16世紀後半の廃棄土坑(町89-1SK002・020)や火災処理土坑(町89-6SX010)、ビットなどが展開する。町89-1は、町89-6と比較して遺構密度が高いが、第2南北街路東側の町屋のような高い密度ではない。

[町89-1(271.4m)・町89-6(132.3m)](第34図)

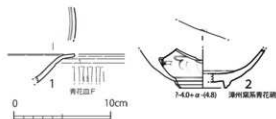
町89-2とともに、推定東外郭確認を目的に設定した調査区。町89-1では、調査区東端より約10m東側に第2南北街路が想定される部分である。調査区東側は、東西方向に帯状に並ぶビット群を、長さ7m程確認できたが、明確に掘立柱建物構成しない。これらのビット群は調査区東端より東西34mの範囲で収束する。これより西側では大型遺構や中型の遺構が展開する。また、町89-1SX007より西側は非常に遺構が希薄となる。

■土坑

町89-1SK002・020(第35図)：町89-1の東端で検出した廃棄土坑。町89-1SK020は東西1.1m、南北1.3m、深さ0.6mで、町89-1SK002の大半を削平する。遺物は床面付近より出土した(第47図25～28)。町89-1SK002は東西0.9m、南北0.9m+ α 、深さ0.4mを測る。

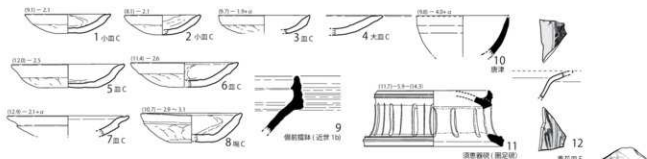
町89-6SX002(第34図)：町89-6の中央で検出した直径0.7m程の円形遺構。全ての遺構を掘削していないが、今回の調査で最も古い中世段階の遺構である。完掘していないが完形率の高い坏A、小皿A1が多く出土した。14世紀以前に比定される資料である(第47図29～32)。

86-1SX005 灰茶色土

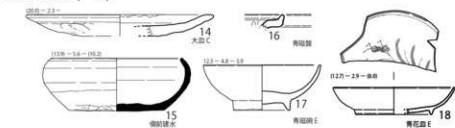


第36図 町89-1SX005 出土遺物(1/4)

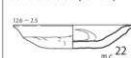
89-2 SD005



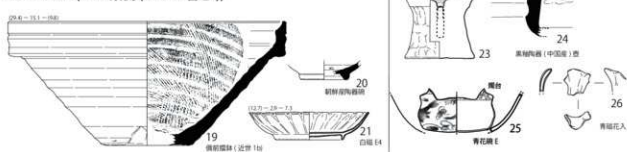
89-2 SD005(1 Tr)



89-2 SD005(5 Tr)



89-2 SD005(2 Tr 東側(SD030 含む))



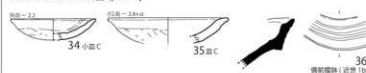
89-2 SD055(1 Tr)



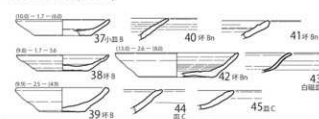
89-2 SD055(3 Tr)



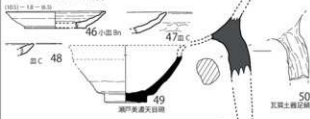
89-2 SD055 上層(3 Tr)



89-2 SD030(2 Tr)



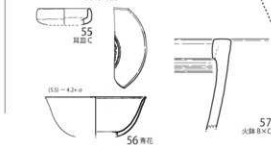
89-2 SD030 上層



89-2 SD030 下層



89-2 SD030 最下層

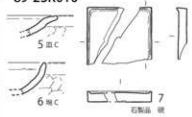


第 37 図 町 89-2 溝状遺構出土遺物 (1/4)

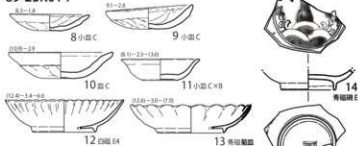
89-2SD025



89-2SK010



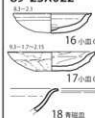
89-2SK014



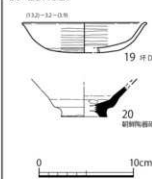
89-2SX021



89-2SX022



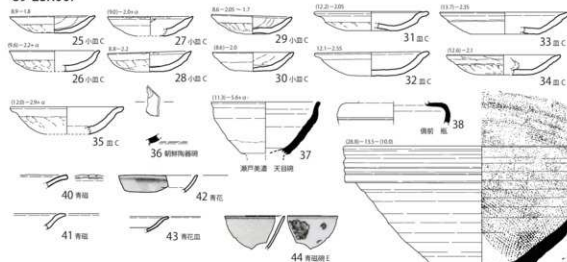
89-2SX027



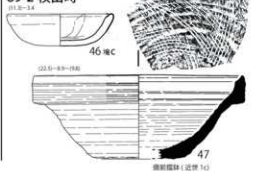
89-2SK040



89-2SX007



89-2 検出時



第 38 図 町 89-2 出土遺物 (1/4)

89-3SD005



89-4SB030c



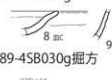
89-4SB030h



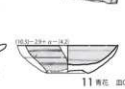
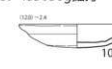
高13~16.7



89-4SB030g



89-4SB030g掘方

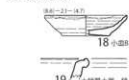


0 5cm

89-4SB030j掘方



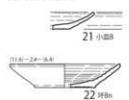
89-5SF040



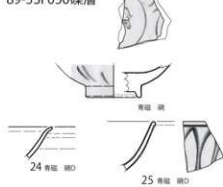
89-5SF040トレンチ下層



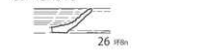
89-5SK045



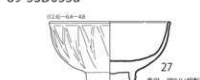
89-5SF050礫層



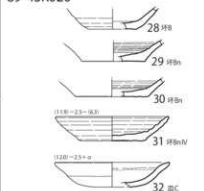
89-4SK010



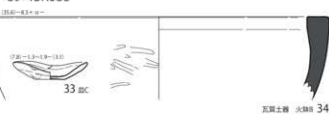
89-5SD055a



89-4SK020



89-4SK035

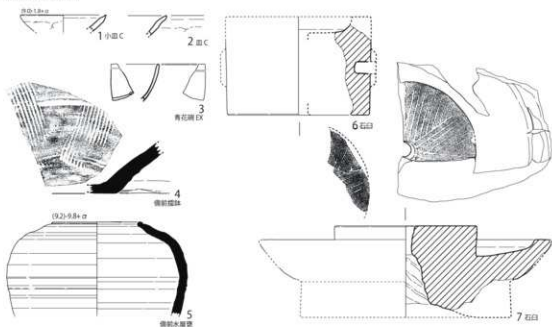


89-4SP027

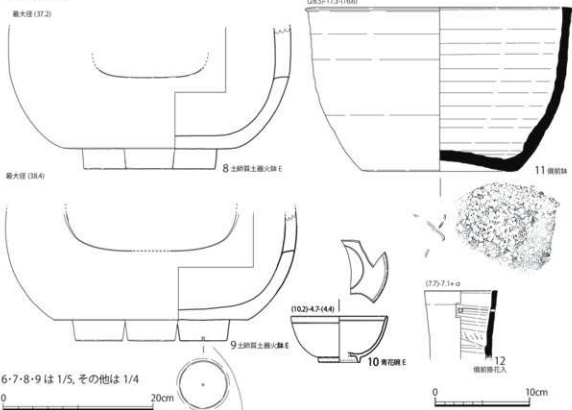


第39図 町89-3・4・5出土遺物(1/4・14は1/3)

86-6S8095b



86-6S040

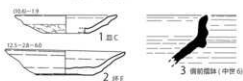


第41図 町86-6出土遺物② (1/4・6～9は1/5)

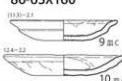
(3) 出土遺物

今回の調査では、コンテナ40箱近くの遺物が出土した。出土遺物は、土師器や陶磁器、国産陶器を主体に14世紀から16世紀末までの幅広い時期にわたるが、16世紀代の遺物が圧倒的に多い。また、越州窯系青磁碗や陶硯など、古代の希少遺物も注目される。なお、瓦の出土はみられない。ここでは、主要遺構に絞って遺構の時期を示すものや特殊な遺物を中心に掲載を行った(第36図～47図)。紙幅の都合上、遺物の種類・名称・法量を、必

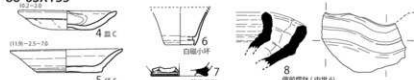
86-6SE140 井戸枠内



86-6SX160



86-6SX135



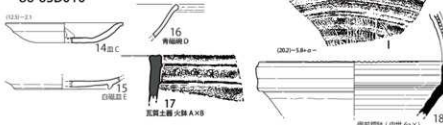
86-6SD005



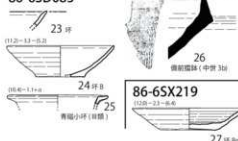
86-6SD010 トレンチ



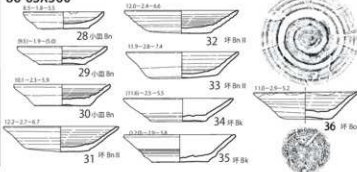
86-6SD010



86-6SD085



86-6SX360



86-6SX219



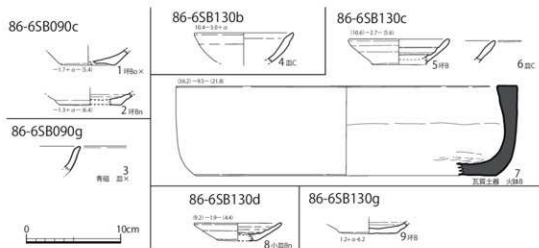
第 42 図 86-6 出土遺物③ (1/4)

要なものについては図中に記載した。また、今回掲載できていない遺物も多数あるが、本報告の際に掲載を行う予定である。図中の法量は全形が解る個体のみに限定して、口径-器高-底径の順で示し、復元した法量については()で示した。

4. 調査結果

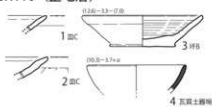
(1) 時期別変遷

今回の調査では、御蔵場に関連する16世紀後半～末の遺構の性格を確認することを目的に、「府内古図」と明治時代の地籍図等を基に作成された「戦国時代の府内復元想定図」(大分市史編集委員会1987)及び、木村幾多郎氏による想定案(木村2001)などを参考に、2カ年約3000㎡の調査を行った。結果として、16世紀後半～末の掘立柱建物や火災処理土坑、北・東・南を画する溝などをはじめ、15世紀頃～16世紀中頃の多様な遺構を検

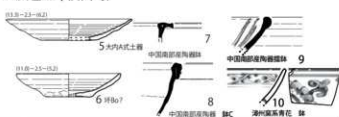


第43図 町86-6出土遺物④ (1/4)

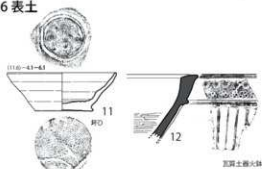
86-6SX110 (整地層)



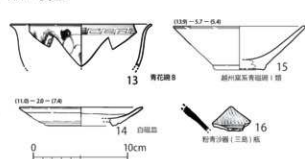
86-6 灰色土 (検出時)



86-6 表土

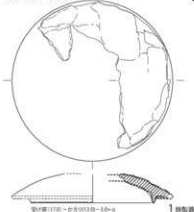


86-7 表土

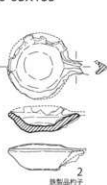


第44図 町86-6出土遺物⑤ (1/4)

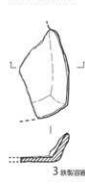
86-6SP088



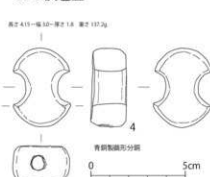
86-6SX135



86-6SX141

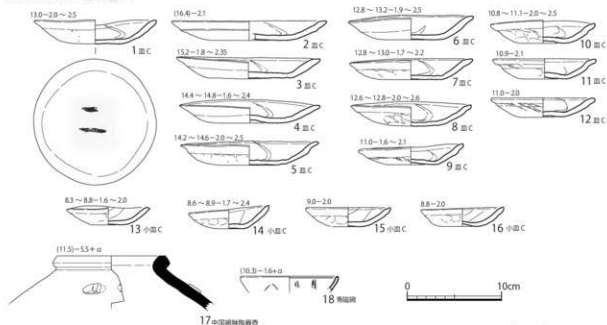


86-6 灰色土



第45図 町86-6出土金属器遺物 (1/4・4は1/2)

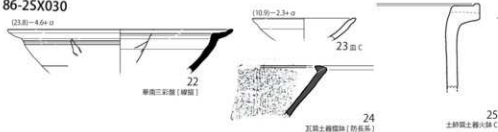
86-2SD005 暗灰色土



86-2SD010



86-2SX030



第46図 町86-2出土遺物 (1/4)

出した。ここでは、15世紀から16世紀末までの遺構の形成過程について、周辺の調査事例を含めて検討する。

①15世紀～16世紀中頃の様相[第1～3段階](第48図)

第1段階：15世紀前後～15世紀後半頃(坏B出現前後の時期)

- ・万寿寺南西部から北西方向に延びる道路側溝と考えられる区画溝(町89-5SD050a～c、町86-2SD050a・b、町5 ASD411～412、町50S-3(大分市教育委員会2005a)、町77SD1189・1211など(大分県教育庁埋蔵文化財センター2010))が形成される。道路跡か【第48図 A地点(以下、同)】。なお、この区画は、北西の隅にあたる町5A区にて「T」字路を形成し、一方は推定御蔵場跡の北外郭付近へ東西方向に延びる。この東西方向の区画は、16世紀後半(5段階)に至るまで繰り返し踏襲される【C地点】。
- ・推定御蔵場跡中央には、「L」字に曲がると想定される溝(町86-6SD085)が掘削される。規模やプランからみて居館的な遺構か【B地点】。

第2段階：15世紀後半～16世紀初頭(坏B主体の時期)

- ・前段階の溝を踏襲した積土をもつ道路状遺構(町89-5SF040、町5 ASD411)が展開。【A地点】
- ・推定御蔵場跡中央では、前段階の溝(町86-6SD085)が埋まり、東側に位置をずらして再び「L」字に屈曲する溝(町86-6SD005)が掘削される。この溝の形成に前後して、坏Bの多量廃棄土坑がみられる(町

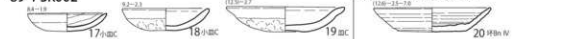
86-3 SK015 黒色土



86-3 SK035



89-1 SK002



89-1 SK002 灰褐色土

89-1 SK020



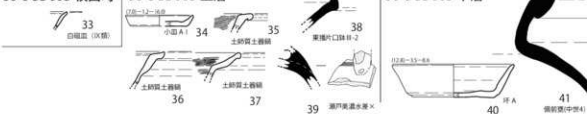
89-1 SK020 暗褐色粘土



89-6 SX002



86-8 SD003 検出時



86-8 SD003 上層

86-8 SD003 下層

第 47 図 町 86-3・8、町 89-1・6 出土遺物 (1/4)

86-6SX219・SX360)。この土師器の多量廃棄土坑の存在などから居館的な性格をもつ遺構が継続して展開した可能性が高い【B地点】。

第 3 段階：16 世紀前半～中葉(坪Bと新たに出現した皿C主体の時期)

- ・万寿寺南西部分から北西に延びる道路の北側部分(町89-5SF040)が廃絶。町89-3・4では、積土をもつ東西溝[町89-3・4SD005]が形成され、新たな区画が形成される。北進していた道路(町89-5SF040)の廃絶に伴って、町89-3・4SD005と並行した西進する道路へと路線が切り替わった可能性が高い。同時に、町86-2を分断していた道路の上面には整地が行われ、溝状遺構(町89-3・4SD005)が形成される。埋没時には、多量の焼土と共に墨書土器を含む皿Cが出土する【A地点】。
- ・中央部には、前段階の遺構を埋め、部分的に整地を行う[町86-6SX110]。また、調査区西側にやや位置をずらして、再び「L」字に屈曲する半町規模となる区画溝(町86-6SD010)が掘削される。これに近接した時期に、同一主軸をもった町86-6SD015・SD150などの小規模な溝が形成されており、町86-6SD010と

SD015・150は連続した方形区画となる可能性がある。これらの溝と主軸を同じくする掘立柱建物(町86-6SB090・170)はこの時期の遺構である可能性がある。なお、溝の南東方向には井戸(町86-6SE140)が掘削される【B地点】。

第3段階は、道路の切り替えや、内部での鳥状の整地(町86-2SX040・町86-7茶色土・町86-6SX110)、小規模な方形区画(町86-6SD015・150)を形成するなど、前段階まで踏襲されてきた空間の利用形態が大きく変化する。

②16世紀後半～末の様相(第4～5段階)(第48図)

第4段階：16世紀後半(厚手の皿C主体の時期)

A：外郭

北外郭の様相：町5次及び町86-1で、内側に積土を伴う2条の東西溝(町5SD101・103)が形成される。この溝は、町86-1の中央付近で収束する可能性が高く、出入口が想定される。東外郭の様相：町89-2で、南北方向の溝(町89-2SD055・030)が掘削される。出土遺物の時期や検出位置などから東外郭と考えられ、調査区中央付近では溝が収束することから、現状では幅6.0m程度の出入口を想定している。なお、この溝に並行して一条の溝(町89-2D025)が確認できる。併存していた可能性はあるが、大半が調査区外となるため関連性は不明である。東外郭の東側は、町屋に付属すると考えられる土坑やピットが密集するが、溝の東10m幅は同時期の遺構が希薄な「空閑地」となっており、出入口に向かう通路的なエリアである可能性が高い。南外郭の様相：東外郭と考えた南北溝(町89-2SD055)は、調査区南端でゆるやかに西側に屈曲しており、現在の東西方向にはしる農道(幅約4m)直下に溝が巡っている可能性が高い。また、西側の調査区である町89-3・4・5では、引き続き東西方向の溝(町89-3・4SD005)が機能していたと考えられる。この溝と町89-2で確認した区画溝との接続関係は確認できないが、町89-3・4・5では町屋的な遺構(井戸・廃棄土坑)は展開しないため、この東西溝(町89-3SD005)と南北溝(町89-2SD055)南端を結ぶライン上に南の外郭が想定できる。なお、東西溝(町89-3SD005)の積土と溝の性格は、考古学的には道路であるか築地であるか確定できないが、北外郭の構造との連続性を考えると築地の可能性が高い。西外郭の様相：町5Aでは、北側を画する溝に接続する小規模な2条の溝が、第4南北街路にそって南北方向に延びており、第4南北街路沿いの調査区である町25(大分市教育委員会2009)で検出された南北方向の溝と接続し、西側を画する外郭施設となる可能性が高い。また、町25次の溝の内側には積土を確認した地点もあり、北側の外郭と同様、築地がめぐっていると考えられる。なお、今回調査した町89-3では、南外郭となる東西溝は調査区外へ延びており、溝が北側に折れる状況は確認できなかったが、上述した第4南北街路沿いの町25次でも溝が途切れる部分があることから、町89-3部分は、御蔵場南西隅の出入口部分となる可能性がある。

B：内部

町86-6北半分においては土坑(町86-6SK025)や礎盤石をもつ建物遺構(SB130)が展開する。また、礎盤石と考えられる扁平な石の入ったピットが多く展開しており、この他にも建物が展開する可能性が高い。次段階に形成されたと考えられる火災処理遺構(町86-6SX100)からは、大量の壁土が見つかっており、この段階に土壁をもつ建物が存在したと考えられる。町86-4では、掘立柱建物(町89-4SB025)がこの時期に併存している可能性がある。さらに、礎石を廃棄したSX030・035が次段階に形成されることから、この巨大な礎石を使用した遺構が付近に存在した可能性が高い。これに対して、町86-6南側や町86-2・7および、東外郭付近の調査区である町37次調査(大分市教育委員会2004)ではこの段階の遺構は非常に希薄であり、「空閑地」であった可能性が高い。なお、北西部にあたる町5A区では、小型の石組井戸(SE500)や桶組の井戸(SE501)が形成される。これらの内部に共通することは、土師器廃棄土坑が確認できない点、日用雑器類(土師質土器鍋や釜など)を廃棄した土坑がない点であり、井戸の規模も比較的小さいという点である。推定御蔵場跡の南側(町86-3～5)のような「町屋」の様相や、町9次調査(大分県教育庁埋蔵文化財センター2005b)で確認されたような武家地の様相とも異なる空間であったと考える。また、瓦の出土も皆無であったことから寺院などの施設とも考えがたく、記録や伝承もない。この段階に四方の外郭が整備され、内部には一定の「空閑地」を挟みながら掘立柱建物や土壁を使用した建物

などが展開する。この周囲には町原的な景観が広がっていたと考えられる。

第5段階：16世紀末～17世紀初頭(厚手の皿・堦C主体の時期)

A：外郭

北側は、前段階の東西溝が埋没後、新たに2条の東西溝(町86-1SD015・020)が同一方向に展開するが、これらの遺構は、この段階の最後に町86-1SX005とした性格不明の大型遺構によって削平され、外郭としての機能を失う。東側は溝が開いていた可能性があるが、この段階の中で完全に埋没し上面には複数の土坑が展開する。これらの土坑は16世紀の最末期に町89-2SD005とした堆積土によって完全に埋められる。南西側は、町89-3・4SD005とした溝が埋没し、その後この直上に積土状の遺構が展開する。西側の様相は不明瞭である。

B：内部

町86-6SX100とした火災処理土坑をはじめとして、焼土の入ったビッドが多く検出され、前段階の最後に発生したと思われる火災後に形成された遺構が町86-6北側で顕著に展開する。礎石を廃棄したSX030・035が形成される他、切り合い上、最も上位の遺構中には拳大～人頭大の礫がつまった遺構が多く、この時期に形成されたと考えられる。また、第4期の建物の建て替えと考えられる、掘方に焼土を多量に含む同一主軸をもった掘立柱建物(町86-6SB095・町89-4SB030)などが形成される。外郭の維持を含めて第4段階と同様の性格を持つ土地利用が継続していたと考えられる。

(2) まとめと課題

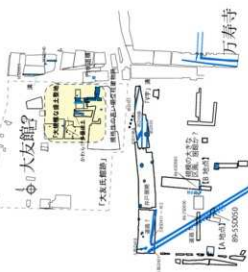
以上の検討から、第3段階から第4段階へ移行する時期が遺構編成の画期となることがわかった。また、第4・5段階では、これまでの中世大友府内町跡の調査で明らかとなっている武家地や町屋、社寺遺構などには類さない性格の遺構群が展開することがわかった。第4・5段階の遺構展開は、東西約205m、南北約85mの長方形の範囲に概ね収まり、南東部(東西約85m、南北約20m)の張り出し部を含む面積約2haの略「L」字の範囲であると考えられる。この略「L」字のエリアは、大友館の南に併設され、現状から北・西・南の一部は、1～2条の溝を伴う積土遺構により、東側はやや規模の大きな溝によって区画される。また、一定の「空閑地」と建物を含むこの内部の遺構群の特徴は、これまでの中世大友府内町跡の調査で検出された既存施設の範囲に属さないことが特徴である。

こうした所見から、この範囲は大友館に接する公共空間であることは容易に理解でき、特別な空間として性格付けられる可能性は極めて高い。今後は、この施設の空間構造や建物構造、さらにはいわゆる中世から近世城下町移行期における蔵場としての「場」の成立年代の問題等々を解明していく必要がある。(長 直信)

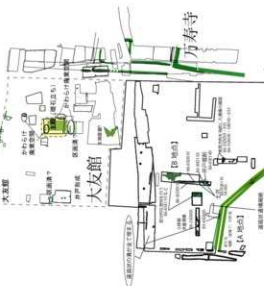
引用文献

- 木村幾多郎1993「研究ノート 府内古国の成立」大分市歴史資料館年報1992年度
- 木村幾多郎2001「豊後府内城下移転と旧府内町」『大分・大友土器研究会論集』
- 大分市史編纂委員会1987『大分市史』中巻 付図
- 大分県教育庁埋蔵文化財センター2005a『豊後府内』1(第5A・5B・8次)
- 大分県教育庁埋蔵文化財センター2005b『豊後府内』2(第9・13・21次)
- 大分県教育庁埋蔵文化財センター2010『豊後府内』16(第4分冊・第77次)
- 大分市教育委員会2004『大分市埋蔵文化財調査年報』vol. 15 2003年度 (町37次)
- 大分市教育委員会2005『大分市埋蔵文化財調査年報』vol. 16 2004年度 (町50次)
- 大分市教育委員会2007『大友府内』9(第25・27次)

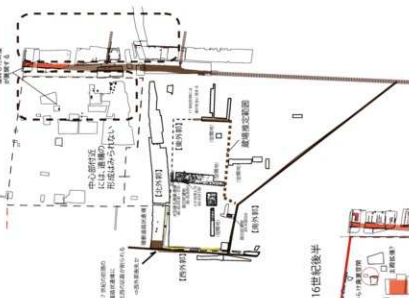
【第1段階】14世紀後半～15世後半頃



【第3段階】16世紀中頃～後半



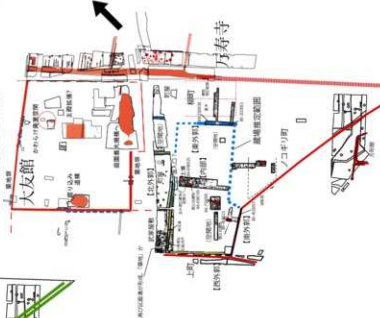
【第5段階】16世紀末
幕府成立後
改修される



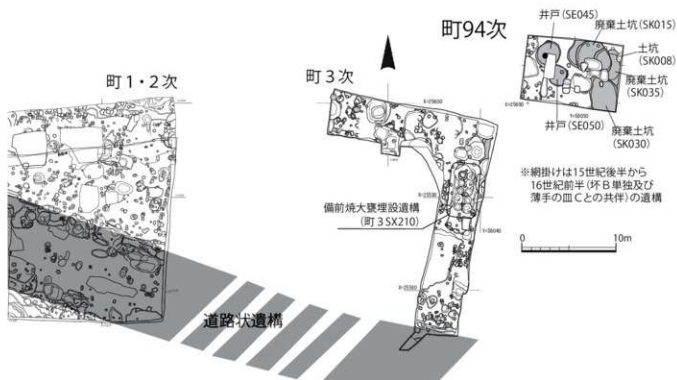
【第2段階】15世紀後半～16世紀前半



【第4段階】16世紀後半



第48図
推定御成場跡周辺の遺構変遷図 (1/6,000)



第50図 町1・2・3次と町94次平面図 (1/600)

これらの調査成果をまとめると、

- 1、15世紀末から16世紀前半の廃棄土坑及び井戸跡を検出。
- 2、東側に廃棄土坑、西側に井戸跡と遺構の位置が明確に分かれている。
- 3、町3次調査区SX210と同時期にあたる16世紀後半以降の大型遺構は検出されなかった。(松浦憲治)



町94次東側調査区遺構掘削状況(南より)



町94SK008出土 黒釉陶器落とし蓋?

第4章 城原・里遺跡第13次調査

1. 調査に至る経過および調査の目的

城原・里遺跡は、大分市大字里に位置し、東西に延びる標高約40mの丘陵東端に所在する(第51図)。これまでの調査により、この丘陵西側では海部郡衙の政庁と考えられる大型掘立柱建物跡が、東側では7世紀に遡る豪族居館ないし評価の可能性のある建物跡群が確認されている。丘陵上の東西で遺跡の様相が異なることから、丘陵西側に位置する前者の字名をとって「城原地区」、台地東側の突端付近に位置する後者周辺を同じく「里地区」と呼称している(第52図)。

平成7年度に民間開発に伴う第1次調査、平成10～12年度に県道整備に伴う第2・3・4次調査地点を行い、城原地区に所在する7世紀末～8世紀の官衙遺跡として広く周知された。その後、平成14年度に、市道の城原・里線道路拡幅工事にともなう第5次調査により、里地区でも7世紀後半～末に比定される官衙関連施設と思われる掘立柱建物跡群が確認されたことをうけ、平成15年度より市内遺跡確認調査を継続的に実施している。平成18・19年度に実施した第10・11次調査では第3・4次調査で確認した官衙関連施設の範囲確定のため調査地点を城原地区に移して調査を行い、平成20年度に実施した第12次調査においては、「里地区」西端の外郭構造を確認するための調査を行った。平成21年度は、調査が進展した「里地区」に所在する第5次～9次・12次調査の本報告を行った(大分市教育委員会2010『城原・里遺跡』)。本年度は、郡衙城周辺に存在すると考えられる「正倉城」の確認を目的として、大分市大字城原字大原に所在する第2・3次調査の南側を100mの面積(南北20m、南北5mのトレンチ)で確認調査を行った。調査期間は、2010年11月29日～12月16日である。



第51図 城原・里遺跡と周辺の遺跡分布図 (1/30,000)



第52図 城原・里遺跡の調査区位置図 (1/5,000) (大分市教育委員会2010『城原・里遺跡』第120図を改変)



写真1 館22次調査空中写真(上が西)



写真2 館23次調査空中写真(南西上空より)
写真奥の調査区は、町92次調査区



写真3 館22次地葉跡(22SX022)土層断面(南西より)



写真4 館23次調査全景(西より)



写真5 館23SX005 土層堆積状況(北西より)
最上層のレンズ状態堆積は、館23SX135



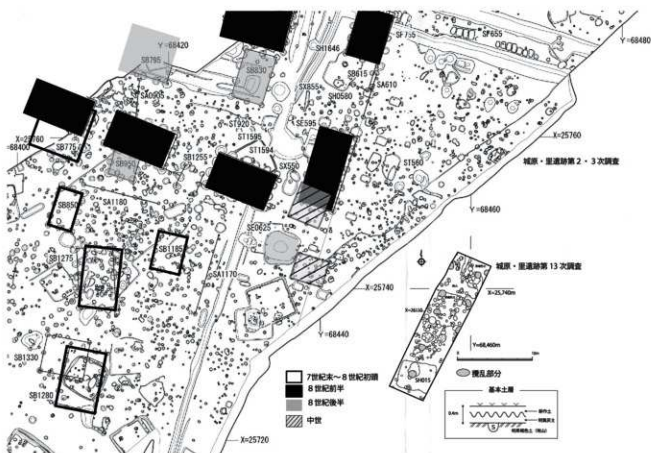
写真6 館23SX005 遺物出土状況(北東より)
坏Bが集中して出土した部分



写真7 館23SX020 遺物出土状況(東より)
坏A・小皿Aなどがまぎって出土



写真8 館23SD025・090 堆積状況(北より)
複数回の掘り返しを確認できる



第53図 調査地点平面図 (1/500)

2. 調査組織

調査指導 大分県教育委員会
 調査主体 大分市教育委員会 教育長 足立 一馬
 調査担当 長 直信

3. 「城原地区」における調査成果(第52図)

「城原地区」は、5世紀末頃から竪穴住居の形成が始まり8世紀第3四半期まで継続して遺構が展開する。これまでの調査から、7世紀末から8世紀第3四半期までを1～5期に分けることができ、「里地区」の遺構変遷とあわせて、A～G期の時期区分を行っている(大分市教育委員会2010)。今回の調査の目的とした正倉については、「E期」(第52図)に想定されているものである。この頃は、「城原地区」が郡庁域と目される「L」字状に検出した規格性のある大型掘立柱建物形成され、西側に並ぶ櫓の存在から、庁域は東西55m、南北55m+αの規模となることがわかっていく。また、「里地区」では、小規模な倉庫群や役宅が形成され、郡衙関連施設が展開する。「城原地区」には、第52図に示すように、丘陵南側に未調査地が広がっており、「城原地区」の郡庁域と、「里地区」の施設をつなぐ間に正倉などの郡衙関連施設の存在が考えられ、今回の調査はこの未調査範囲での7世紀～8世紀代の遺構確認を目的としている。

4. 調査概要と今後の課題(第53図)

調査の結果、竪穴住居跡と考えられるプラン(SH015)を確認した他、直径20cm程度を測るピットを高密度に確認した。ピットからの出土遺物はきわめて少ないが、須恵器の裏片や土師器片などが出土したピットもあり、8世紀代の遺構も存在したと考えられる。一部に直線的に並ぶピットもあるが、今回の調査範囲内では櫓や建物とは断定できなかった。今後も周辺範囲の調査を継続的にを行い、遺構の確認を行いたい。(長 直信)

遺構写真2 (中世大友府内町跡第86・89次〔推定御藏場跡〕)



写真9 推定御藏場跡全景 (南上空より)
2010年5月27日撮影



写真10 町86-2・6・7全景 (南東より)
写真奥より町86-2・7・6



写真11 町86-1及び町86-6北側空中写真(上が北)
町86-6北側は、建物の礎型となる石や生石遺構、境土の入った遺構などを複数検出



写真12 町86-1・6・7空中写真(上が西)



写真13 町89-3及び町89-4・5空中写真(上が北)
写真中央の地割・畦畔と平行して東西溝(町89-3SD005・町89-4SD005)を検出



写真14 町89-2空中写真(上が北)



写真15 町86-3・4・5全景(北東より)



写真16 町86-6・3全景(上が北)
町86-6の南端、町86-3北端ではともに区画施設は確認できない。写真中央の農道直下に存在か

遺構写真3 (中世大友府内町跡第86・89次〔推定御蔵場跡〕)



写真17 町86-1SD015・020 検出状況 (東より)



写真18 町86-1サブトレンチ東壁堆積状況 (南西より)
中央の堆積は町86-1SD030。手前に見える柱穴は町86-1SB040



写真19 町86-1SX005 部分東壁東西土層 (西より)
町86-1SD015・020・035・045 状況 (第10図参照)



写真20 町89-2SD005 下層遺構検出状況 (南より)



写真21 町89-SX021・022 付近検出状況 (東より)
東外郭部分の入口想定部分、遺構切り合い状況



写真22 町89-2 2トレンチ北壁土層堆積状況 (南より)
町89-SD025・030 堆積状況



写真23 町89-4SD005 東壁土層 (西より)
溝の左手に横土層が堆積 (第21図参照)



写真24 町89-5サブトレンチ南壁土層 (北より)
町89-5SF040 堆積状況 (第21図参照)



写真25 町89-4SD005 検出状況 (東より)



写真26 町89-3SD005 検出状況 (西より)



写真27 町86-2SD005 堆積状況 (西より)
町86-2 2トレンチ東壁部分 (第30図参照)

遺構写真4 (中世大友府内町跡第86・89次〔推定御蔵場跡〕)



写真 28 町 86-6 北側遺構掘り下げ状況 (北より)



写真 29 町 86-6 南側遺構掘り下げ状況 (北より)
町 86-6SD005・010・015 などの南北方向の溝を検出。
北側と比較して小型遺構が希薄



写真 30 町 86-6SX030・035 周辺遺構掘削状況 (北より)



写真 31 町 86-6SB130 検出状況 (北東より)



写真 32 町 86-6SX100 堆積状況 (東より)
多量の焼上ブロックが堆積する



写真 33 町 86-6SX035 検出状況 (東より)



写真 34 町 86-6SX040 遺物出土状況 (西より)



写真 35 町 86-6 南端遺構検出状況 (南より)



写真 36 町 89-4SB025・030 全
景 (南より)

報 告 書 抄 録

ふ り が な	おおいたし しなないせきかにんちようさがいはう							
書 名	大分市 市内道路確認調査概報 ー2009・2010年度ー							
副 書 名								
巻 次								
シ リ ー ズ 名								
シ リ ー ズ 番 号								
編 著 者 名	長直信・五十川雄也・松浦憲治							
編 集 機 関	大分市教育委員会							
所 在 地	〒870-8504 大分市荷揚町2番31号 TEL (097) 534-6111							
発 行 年 月 日	西暦2011年3月31日							
ふ り が な	所 在 地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
所 収 道 路 名		市町村	道路番号					
大友氏館跡第22次	大分市顕徳町	44201	201347	33° 13' 46"	131° 37' 07"	2009.10.01～2009.12.26	204.2㎡	確認調査
大友氏館跡第23次	大分市顕徳町	44201	201347	33° 13' 48"	131° 37' 05"	2010.09.13～2010.11.10	540㎡	確認調査
中世大友府内町跡第86次	大分市六坊北町	44201	322051	33° 13' 41"	131° 37' 00"	2009.10.05～2009.12.26	2189㎡	確認調査
中世大友府内町跡第89次	大分市六坊北町	44201	322051	33° 13' 41"	131° 37' 04"	2010.05.06～2010.06.15	937.7㎡	確認調査
中世大友府内町跡第94次	大分市顕町	44201	322051	33° 13' 57"	131° 37' 13"	2010.08.19～2010.09.13	69㎡	確認調査
城原・里道跡第13次	大分市大字城原	44201	201225	33° 13' 35"	131° 44' 13"	2010.11.26～2010.12.16	100㎡	確認調査

所 収 道 路 名	種 別	主な時代	主 な 道 構	主 な 道 物	特記事項
大友氏館跡第22次	居館跡	中世	掘り込み地蔵壇・土坑・整地	土師器	
大友氏館跡第23次	居館跡	中世	掘立柱建物・整地・大型土坑	土師器、青花、青磁、瓦質土器	
中世大友府内町跡第86次	集落	中世	掘立柱建物・井戸・土坑・溝	土師器、青花、青磁、瓦質土器、陶器	
中世大友府内町跡第89次	集落	中世	掘立柱建物・土坑・溝	土師器、青花、青磁、瓦質土器、陶器	
中世大友府内町跡第94次	集落	中世	井戸・土坑	土師器、青花、青磁、瓦質土器、陶器	
城原・里道跡第13次	集落	古代	竪穴住居・ビット	須恵器、土師器	

要 約	大友氏館跡第22次調査では、館東側の外郭ラインの確認を目的に調査を行った。結果として、外郭ライン（土師もしくは土器状構造物の基礎地蔵跡など）の可能性があり、16世紀後半段階の硬化層と掘り込み地蔵跡を抽出した。第23次調査では、館の中央から東端の道構の様相把握を目的に調査を行った。結果、最盛期（16世紀後半）の館の時期の道構は確認できていないことから、館の門をくぐってすぐに広がる「空閑地」であった可能性がある。調査区西端では、館23SD090とした南北方向の溝が確認された。中心建物の東側に区画溝が存在していたこととなり、館内部の景観を考える上で大きな成果となった。 中世大友府内町跡第86・89次調査は、推定御蔵場跡の確認を目的に調査を行った。結果、四方が溝に区画された一定の空閑地を有する施設を確認した。今回の調査範囲内では、「蔵場」とする積極的な所見は得られなかったが、大友館に接する地点であることから、大友館に関連する公共空間であった可能性が高い。中世大友府内町跡第94次調査では、15世紀末から16世紀前半の廃棄土坑及び井戸跡を抽出した。 城原・里道跡第13次調査では、郡新城周辺に存在すると考えられる「正倉城」の確認を目的として、「城原地区」の調査を行ったが、古墳時代の竪穴住居跡やビット群を確認したのみで、官衙関連施設は確認できなかった。
-----	--

大分市市内遺跡確認調査概報

— 2009・2010年度 —

国指定史跡大友氏遺跡

大友氏館跡第22次調査

大友氏館跡第23次調査

中世大友府内町跡第86次調査

中世大友府内町跡第89次調査

中世大友府内町跡第94次調査

城原・里遺跡第13次調査

平成23年3月31日

発行 大分市教育委員会

大分市荷揚町2番31号